
ドラゴンクエスト? ~天空の花嫁~

アメツチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドライゴンクエスト？～天空の花嫁～

【Zコード】

N7449X

【作者名】

アメツチ

【あらすじ】

『ここにあるのは『懐かしさ』 古き良き王道ファンタジー、
開幕！』 愛する者を救うため 父、子、そして孫の三代に渡
つて受け継がれる強き意志の物語。天空に導かれた者たちの冒険が
今、始まる。同名タイトルの名作RPGをたどる一次創作です。
他サイトで公開中の作品を転載。オリジナル要素控えめ、原作に沿
ったストーリー展開にしています。

松明が静かに燃えている。

豪奢で毛先の深い絨毯を踏みしめる感覚がいつもと違つ。

「まあ陛下。こちらでござります」

「つむ。本当に苦労をかけたな。礼を言ひついで」

実直で、かつ強靭な意志を感じさせる瞳を柔らかく細めながら、深紅のマントに身を包んだ男は給仕の女を労つた。上品な微笑みを浮かべた初老の女は、そのまましとやかに腰を折り、男を先導して歩き出す。

本当は駆け出したかった。一分一秒でも早く愛する者の元へと向かいたい。

だが男は逸る気持ちをぐつと抑えた。大柄な自分が走ればそれだけ音と振動をまき散らす。それが『彼女』には良くないのだと口酸つぱく言われていたからだ。

給仕の女に付きゆつくりと歩く。その姿は王者の威厳すら漂つ。否。男は正真正銘の王だった。名をパパスという。

深き森、険しき山に囲まれた天然の要塞、堅牢にして優美さをも兼ね備えた古城グランバニア　その頂点に立つ男である。はあるか遠国にまでその勇名が響き渡るほどの猛者が、これほどまでに氣もそぞろになる理由。それは

「いらっしゃりです。中ではお静かに。マーサ様も『い子息様も』よつやく落ち着いたところでござりますゆえ」

「う、うむ……」

そう。パパスとその妻マーサに、待望の男子が誕生したのだ。

一国の王から一人の父親へ。魔物相手にも決してひるまないパパスだったが、今日ばかりはいつもどおりとはいかなかった。『自分

に子ができた』という初めての経験の前には、持ち前の冷静さなど蠅燭の火のように吹き飛んでしまっていた。

精緻な意匠の施された扉をゆっくりと開ける。かすかな熱と、そして溢れんばかりの聖なる氣をパパスは感じた。

中央の寝台に横たわる妻が、気配を感じて振り返る。

「あなた……」

「マーサ……！ ょく、よくやつてくれた」

つい小走りに駆け寄る。厳格な顔にわずかな赤みを浮かべたパパスを見て、マーサが柔らかく微笑んだ。疲れの余りか若干やつれていたが、その表情は常日頃にする以上に美しく、神々しさすらあつた。

パパスの視線が、彼女の隣で毛布にくるまれた赤子へと行く。「ほら。私たちの子よ。今は眠っているけど、とても元気な声を上げていたわ……」

「おお、おお！ 下の階にも聞こえてきたぞ。そうか、男か！ 元気そうだ！ うむ、田元はお前にそっくりだ！」

自分でも訳の分からぬことを喋る。その様子に乳母がくすりと笑つた。

マーサが声をかける。

「ねえあなた……。この子に名前を付けてあげないと」

「うん？ おお、そうだな。何がいいか」

パパスはしばらく寝台の回りを歩いた。顎に手をあて、これまでにいくつも考えた候補の中から選んでいく。この感動を表現し、自分が愛する妻の宝となるに相応しい名を。

しばらくの沈思黙考の後、パパスはマーサに向き直った。彼には珍しい、満面の笑みを浮かべて言つ。

「よし。トンヌラといふのはどうだらうか」

「まあ、素敵なもの前……賢そうで、優しそうで」

「だらう？..」

「ええ。……ねえ、あなた。私もこの子の名前を考えてみたの」

遠慮がちな妻の申し出に、パパスは無言で先を促した。

「アラン……とこの子、どうかしちゃ..」

「アラン、か。こまこまぱりとしないが……お前が考えたのなら、
そうしよひ

妻に笑いかける。ぱそつ、と深紅のマントを翻し、パパスは赤子
とそつと抱え上げた。

「アラン。今日からお前はアランだ！」

「まあ、あなたつたり……」ほつ、ほつ。

「マーク？ ビーッした、しつかりしき。マークー！」

声は次第に遠くなる。

潮騒の音が、ビーッからか聞じて始めた。れれれ、れれれ……

と。

2・船上の勇気

「あー……あー……

規則正しく響くその音に、アランは目を覚ました。

固い寝台に横になつていると、身体がゆっくりと上下に動いているのを感じる。揺りかごのように心地よいその揺れからアランは身体を起こした。

利発で優しそうな瞳が印象的な少年である。滑らかな肌は健康的に日焼けし、髪はよりはたくましさが田を引く。

アランは枕元に置いた帽子を手にとった。ざんばらで伸び放題の黒髪を、青い布を巻いて作った簡素な帽子で包み込んだ。

寝台の縁に腰掛けたとき、部屋の中心で読み物をしていた男が振り返った。

「おお、起きたか。アラン」

「お父さん」

口元に蓄えた鬚も凜々としてこの男はパパスといつた。アラン自慢の父親である。

「うー……ん」と伸びをしてから、アラン少年は父の元へと駆け寄つた。

まだたつたの六歳ではあるが、父に連れられいくつかの旅を経験したアランは、寝坊という言葉とは無縁の生活を送っていた。これも長旅で鍛えられた結果である。

机の縁に顎を乗せ、じぱりと父の横顔を眺めていたアランは、ふいに声をかけた。

「ねえお父さん」

「ん?」

「僕、ゆめを見たんだ。りっぱなお部屋で、お父さんがすこく格好いいマントをしているの。おうさまなんだって」

「王様? はははは。アラン、どうやらまだ寝ぼけているようだ

な

嘘じやないのにな、とアランは思つたが、それ以上何も言わなかつた。ただ不満そうに頬を膨らませるだけである。

その様子を見たパパスは苦笑を浮かべながら、読んでいた分厚い書物を閉じた。アランは以前、興味本意でその中身を見てみたが、長い文章どころか文字も読めないアラン少年はすぐに貢をめくるのを諦めた。それ以降、父の本にはあまり触らないようにしている。「もうすぐ港に到着する。それまで外で遊んでなさい。潮風に当たれば眠気も覚めるだらう」

「うん」

「だがあまり走り回るんじゃないぞ。甲板にいる人々の迷惑にならないようにな」

「はーい」

アランは駆け出し、すぐに何かを思い出して引き返す。部屋の隅に設えられたタンスから、薄紙に包んだ薬草を取り出す。

「これがあれば怪我をしてもだいじょうぶだよね？」

微笑むパパスに、アランは薬草を片手に元気よく言つた。

「それじゃ、行つてきます！」

階段を上がり、扉をくぐる。

途端に頬を撫でる冷たい風に、アランは思わず眼を細めた。

澄み渡る蒼い空。

天高くどこまでも盛り上がる雲。

風を受けゆつたりと飛ぶ鳥たち。

そして空よりもさらに深く濃い青に染まつた大海原。

アランは巨大な船の上にいた。

数日前、アランたちはパパスの顔なじみの船長と偶然再会し、どこのお金持ちが所有するこの船に便乗させてもらつたのだ。目指すはサンタローズという村である。かつてパパスとアランが住んでいた長閑で平和な村だ。

そこはアランの記憶に残つてゐる最初の故郷である。

サンタローズに帰れると思うと、自然と気持ちが高揚した。

陽光のまぶしさに目を細めながら、アランは口笛をくちばさむ。波に揺れる甲板上も何のその、軽やかな足取りで目当ての場所へと歩いて行く。やがて甲板の幅はぐつと狭くなり、揺れも大きくなつた。船首の部分だ。

帽子と同じ青色の、粗末な布の服を海風にはためかせながら、アランは鋭く突き出した舳先部分へと進む。下を見れば目もくらむような高さだが、アランは取り立てて恐怖を感じた様子もなく、「うわあ！」と感嘆の声を上げた。

海。空。水平線だ。

世界はどこまでも広い。

いつか自分が大きくなつたら、父とともに世界中を旅して回りたい。それが幼いアランの大きな夢であった。

「おおいつ！ 坊主、危ないぞ！ 戻つてこい！」

ふと背後から船員の呼ぶ声がした。気がつくと舳先のかなり先の方まで進んでいたようだ。慌てて戻り、船員の前に立つ。全身真っ黒に日焼けした船員の男は大げさなため息をついた。

「ああびっくりした。まったく、坊主の身に何かあつたら俺が船長にどやされるんだぜ？」

「ごめんなさい」

アランは素直に頭を下げた。船員は怒つたような、困つたような表情を浮かべていたが、やおら豪快に笑い始めた。

「ま、危ない危なくないは抜きにしてだ。坊主、お前よくあそこまで行けたな？ 怖くなかったのか？」

「ううん。とつても楽しかつたよ。海つて、すごく広いんだね」

「そりがそりが。さすがパパスの旦那の息子さんだ。勇氣がある」
ぱんぱんぱん、と頭を叩かれる。おそらく本人は撫でているつもりなのだろうが、アランとしてはたまたものではない。小さく「おじさん……いたい」とつぶやく。

だが船員の男は氣にした風もなく、嬉しそうに語り始めた。

「いいか坊主。坊主が立つてた触先の部分はな、俺たちの船乗りの中じゃ『勇気を試す場』になつてゐるのさ。新米のヒヨックジもは、まず大抵あそこに立つと怖じ氣づく」

「え？ ふなのりさんなのに？」

「そうや。坊主は勇氣がある。新米ヒヨックの半分も生きちゃいないにもかかわらずだ。きっと大人になつたらえらいことをやってのけるぞ、坊主！」

「えらいことって？」

「えらいことは、その……えらいことだよ。まあそのうちわかるつて」

ばんばんばん、と相変わらず容赦なく叩かれる。それが親愛の表れだと子どもながらに察したアランは、目の端に小さく涙を浮かべながらも笑顔でうなずいていた。

3・小さな出逢い

その後、アランは船の中を探検した。乗船してから数日、すでに何度も船内は見て回っていたが、何度見ても面白い。例えば風に揺れる帆の様子とか。

床一杯に敷き詰められた荷物の山とか。

何故か風呂場で自分を驚かそうとしてくる変なおじさんとか。

逢う人逢う人、みな笑顔で迎えてくれる。そして誰もが、アランの父パパスはすごい人だと言ってくれるのだ。アランにはそれが何より楽しく、そして誇らしかった。

だが、その楽しい旅もそろそろ終わりの時を迎えるとしている。水平線ばかりだった海に、うつすらと陸地の影が見え始めたのだ。「港が見えたぞー！」

マストの先に作られた見張り台で、船員が大声を上げる。にわかに慌ただしくなる船上の直中に立ちながら、アランは興奮と寂しさを同時に感じていた。

「そろそろお別れだな、坊や」

声をかけられ振り返る。真っ白な服を着た初老の男性が微笑んでいた。航海中、よくパパスと話をしていた船長だ。アランもずいぶんと可愛がつてもらつた。まるで実の息子のように。

わざわざにうなだれるアランの頭を撫でながら、船長は言つ。

「さ……お父さんを呼んできてくれないか。もうすぐ港に着く」

「うん」

小さくうなづいたアランは駆け出した。密室にいる父を呼びに行く。

アランから港到着の報を受けたパパスは感慨深そうにうなづいた。「サンタローズを出てもう一年になるか。早いものだな。まだお前が四つのときだから、覚えていないかも知れないが」

「ううん。僕の故郷だよね、お父さん。覚えてるよ」

「そうか。では、行くとしよう。忘れ物がないようにな」

そう言つとパパスは部屋を出て行く。父に連れ立つて扉をくぐつたアランは、ふと背後を振り返つた。誰もいなくなつた部屋に向かつて深くおじぎをする。

「お世話になりました。行つてきます」

辿り着いたのは、巨大な船体には少々似つかわしくない小さな港だった。

操舵手の妙技でぴつたりと横付けされ、桟橋の代わりに大きな板が船との間にかけられる。アランは父と並んで、その作業を感心しながら眺めていた。

そのとき、港に人影があることに気付いた。三人。

「ルドマンさん！ お待たせしました！」

「ご苦労、船長さん！ 相変わらず時間どおりで感心ですね！」

船長と氣安げに会話する港の人物。遠目でも恰幅が良さがわかつた。傍らには小さな女の子がふたり、寄り添つていた。

ルドマンと呼ばれた男が桟橋代わりの板に足をかける。 と同時に、右側にいた女の子がルドマンを追い抜いて船に駆け込んできた。黒髪が海と空の蒼に映える。あつという間にパパスの前まで辿り着く。

きょとんとするパパスに向かつて、黒髪の女の子は氣の強そうな瞳を向けた。

「おっさん。邪魔よ」

「お、おっさん……？」

思わぬ台詞にパパスが目を白黒させる。次いで女の子はアランにも目を向けた。ほとんど睨むような表情ながら、そこに潜む可憐な容貌にアランはどきりとした。

「いらデボラ！ 待ちなさい」

「ふんつだ」

ルドマンの声にも振り返らず、デボラと呼ばれた少女はさうに奥へと駆けていった。彼女が向かったのはアランが唯一、立ち入ることが許されなかつた専用の客室がある場所だった。

ルドマンがようやく板を渡りきる。傍らにはもう一人の女の子がいた。

アランはまたも、どきりとする。

大きなリボンと空のよつうな蒼い髪が印象的だつた。デボラとは反対に、清楚な華を思わせる可愛らしい女の子である。

彼女はアランの視線に気付くと、わずかに身体をルドマンに寄せた後、はにかみながら頭を下げてきた。

ルドマンが恐縮の体でパパスに詫びる。

「申し訳ない、お客人。私の娘がとんだ粗相をしてしまいましたな……」

「いえ。お気になさらず。元氣があるのは大変良いことです。……その子もあなたの？」

「ええ。フローラと言います。私はこの子の父、ルドマンと申します。さ、『挨拶なさい。フローラ』」

「はい、お父様。……初めてまして。フローラと言います。さきほどはねえや……姉が失礼をしました」

「これは驚いた。ずいぶんしつかりしたお嬢さんだ。……つと、失礼。挨拶が遅れましたな。私はサンタローズのパパス。こちらは私の子、アランです」

「は、はじめまして……」

突然名前を呼ばれ、アランはどきどきしながら礼をした。何だか格好悪いなと思いながら、ゆっくりと顔を上げる。

ルドマンは「利発そうな『子息ですな』と朗らかに笑い、フロー^ラは先ほどよりも打ち解けた笑顔を見せてくれた。アランは再び顔を赤くしてうつむいた。

それからパパスとアランは船長に感謝の礼を言い、併せてルドマンたちの船旅の安全を祈った。彼らもまた、パパスたちの行く末に

幸多きことをと祈ってくれた。

船はゆっくりと出航していく。その後ろ姿を見つめながら、アランはふと、偶然出逢った一人の少女の顔を思い出すのであった。

4・リストの恩返し

船が出てすぐ、パパスとアランの元に駆け寄つてくる人影があつた。

「おおっ、パパス！ パパスじゃないか」

「あらあら、まあまあ。ずいぶん久しぶりだねえ！ 一年ぶりじゃないかい？」

彼らは港の管理をしている夫婦だった。パパスとは旧知の仲である。

しばらく旧友と雑談をしていたパパスは、所在なげに立っていた息子に向かつて言った。

「父さんはこの人たちと話があるから、しばらく散歩でもしていなさい」

「うん。わかった」

「よし。だがアラン、港の外には出るんじゃないぞ。危ないからな」

「はーい」

アランは歩き出した。

港は陸から建物だけ突き出たような形になつていて、海面がすぐ側にある。海からの風も気持ちよく、アランは終始上機嫌だった。

ふと、どこからか声が聞こえた。

きい、きい……という動物の声だ。アランの表情が変わる。その声はどこか、助けを求めているように思えたからだ。

声の主はすぐに見つかった。港の端、木組みの足場がやや崩れているところで、大きなリストが一匹足を取られていた。口には小枝を噛んでいる。どこかにその枝を運ぼうとして誤つて嵌つてしまつたのかもしれない。

アランが近づくと、リストはさらに甲高い声を上げて暴れた。

じつとリストを見つめながら、アランはゆっくりと言つた。

「だいじょうぶ。もう心配いらなによ。キミを助けてあげる」
リスがぴたりと大人しくなる。リスの大きな黒い瞳がアランを見つめていた。

慎重にその身体に手をかけ、アランはリスを解放した。ほつと息をつく。どうやら怪我もないようだ。

「ほら。 お行き」

促すとリスは勢いよく駆け出した。微笑みながらそれを見送るアラン。

ところがリスは、港と陸地とを繋ぐ桟橋のところで立ち止まった。アランを振り返り、尻尾とヒゲをぴくぴくと動かす。

「……付いてこいつてことなのかな？」

アランが歩き出すとリスも走り出す。アランと一定の距離を保つように、たびたびリスは振り返ってきた。どうやら本当にどこかへと案内してくれているようだった。

桟橋を越えてすぐ脇に林がある。リスはその中へ入っていく。しばらく行くと、何やらこんもりと枝が盛られた場所へと辿り着いた。そこから数匹の小さなリスが顔を覗かせている。

「ここがキミの家なんだ。立派だね。でもいいの？ 僕をここに連れてきても

するとリスは巣の回りに落ちているものを鼻先で示した。財布やら人形やら、おそらく旅人が落としたであろう品々ゴールドが土にまみれて転がっているのがわかつた。中にはわずかながらお金もある。

どうやら助けてくれた御礼に持つていけといふことらしい。

一度は断ろうとしたが、リスが服の裾を引っ張つてまで引き留めよつとするので、アランは仕方なく落とし物のひとつを手に取った。細長い木製の武器『ひのきの棒』である。おそらくただの枝と間違えて持つてきてしまったのだろう。巣の脇にどことなく邪魔そうに置いてあるのが印象に残っていたのだ。

落とし物の割にはしっかりした加工である。幾重にも布が巻かれたりの部分に手を添える。見よう見まねで構えてみると、何だか

憧れの父に近づけたような気がして嬉しくなった。

リスがきい、きいと鳴く。「気に入ってくれてよかつた」と言つているようだつた。

「ありがとう。じゃあ、元氣でね」

アランはリスたちに別れを言つた。元来た道を引き返していく。バスとの旅で鍛えられたせいか、方向感覚には少し自信がある。迷うことよりも、父の言いつけを破つた形になってしまったことの方が心配だつた。

「早く戻らなきや」

少し焦りながら、アランは林を抜ける。

その直後だつた。

「えつ……？」

目の前にモンスターが現れたのは。

5・はじめての戦い

「ピキイーッ」

草むらから現れた三体のモンスター。青く小さな身体を震わせながら、アランに対して威嚇の声を上げてくる。

「ス、スライム！？」

「ピュキイツ！」

「うわあっ！」

いきなり襲いかかられ、アランは尻餅をついた。彼の頭があつた場所を、一匹のスライムが通過していく。体当たりされたのだ。以外と俊敏なスライムの動きに、アランは背中に汗をかく。別の一匹が正面から迫ってきた。アランは唇を噛み、右手の『ひのきの棒』を握り直した。

父の姿を思い出しながら、正眼に構える。

「……来いつ」

「キュイイツ！」

アランの声に応じて、スライムが飛び込んできた。アランは目を逸らさず、大きく武器を振り上げた。震える足を叱咤して、一步前へ踏み出す。

「はああっ！」

そして思いっきり振り下ろした。

ひのきの棒のちょうど中心のところで、スライムの身体をとらえる。握りの部分に痺れるような衝撃が伝わってきた。力が緩み、手放しそうになるのを堪え、最後まで振り抜く。スライムの身体が吹っ飛んだ。

「……イ……」

草むらに落ちたスライムは小さく声を上げ、やがて姿が消えた。アランは荒い息をつきながら、自らの手を見る。

そこにはまだ、先ほどの感覚が痺れとして残っていた。

「やつた……！」

会心の一撃

アランは初めて、自分の力だけでモンスターを撃退したのだ。だが、勝つて兜の緒を締めるには、まだアランは幼すぎた。

「キイイツ」

「あつ！？」

残った一匹がアランの左腕にかみついたのだ。鋭い痛みとともに、左腕がかあつ、と熱くなる。無我夢中でスライムを引きはがした拍子に、赤い血が空に舞った。

数歩下がって、アランは小さく呻く。先ほどまで感じていた高揚感が急にしぼんでいくようだった。

仲間と合流したスライムが一匹、真正面から迫ってくる。

「これが

戦い。

父の雄姿を間近で見たときは、「何で格好いいんだろう」と思っていた。いつか自分も、と思っていた。

でも、今の自分は

「キイ、ピキュキイイーツ！」

「……お父さんっ！」

わゆる、とアランは皿をつぶらる。

そのときだ。

「おおおおおあつ！」

勇ましい、けれど懐かしい雄叫びとともに、風がアランの横を通りすぎた。

皿を開ける。ああ、とアランは歓喜の声を上げた。

「お父さん！」

「下がっている、アラン！」

言ひが早いが、パパスは愛剣を手にスライムの一匹に斬りかかっ

た。

その動き、まさに疾風迅雷。

スライムは避けることもできず、に真つ一いつに両断される。

残った一匹がパパスの方を向く。その時にはもう、パパスは次の踏み込み動作に入っていた。

「むんつ！」

返す刃で雑草ごとスライムの身体を薙ぎ払う。悲鳴も上がらずスライムは全滅した。

恐るべき一回攻撃。

アランは感動に打ち震えるとともに、自らが握っていた『ひのきの棒』を少ししおげた表情で見つめた。

「大丈夫か、アラン」

パパスが近づいてくる。アランは笑顔でうなずこうとして、左腕を押さえた。

「……痛つ」

「待つてろ。すぐに治す。…………、ホイミー」

かざしたパパスの手から、白く温かな光が漏れる。アランの腕の傷がだんだんと塞がつていった。

そうだ、とアランは思い出す。パパスは剣技だけではない、回復呪文も使えるのだ。アランはまだ、呪文のひとつも使えない。覚えるならまず真っ先にこの呪文にしよう、とアランは思つた。

腕の痛みも傷口もすっかり消えてなくなつたのを見届けると、早速パパスはアランを叱つた。

「アランよ。外に出ててはいけないと父さんは言つたはずだな。言いつけはきちんと守らなければいけないぞ」

「……ごめんなさい」

「ふむ」

すると何を思つたか、パパスは草むらを見た。

「しかし、たつた一人でスライムを倒すとは、正直父さんも驚いた」

「……え？」

「だが今後はひとりで危ないことにはしないように。いいな？」

「うん」

「よし。では行くとしよう」

差し出された父の大きな手を握り、アランは笑顔で歩き出した。

6・サンタローズの村

広々とした草原となだらかな丘をひたすら歩くと、^{鬱蒼と茂る森}と小高い山が見えてきた。そこがアランたちの目的地である。

木々に半ば隠れるように、ひっそりと村があった。

「ようやく着いたか。サンタローズ」

パパスが感慨深げにつぶやく。普段は勇猛で冷静沈着な父だが、どことなくほつとして嬉しそうだとアランは思った。

村の入り口にあたる木組みの門の前には、簡素な鎧を着込んだ男が門番として立っていた。彼は村にやってくる人影に一瞬目を細めたものの、すぐに破顔一笑、満面の笑みで迎えてくれた。

「やあ！ パパスさんじやありませんか！ お久しぶりです！」

「ああ。しばらくぶりだった。皆に変わりはないのか？」

「ええ、もちろん。おつと、いつしかやいられない。皆に報せないと…」

吉川が早いが、男は門の番を放り出して村へと走っていった。アランはつぶやく。

「お仕事、いいのかなあ」

「はははは」

むつかしい顔をするアランに、パパスは声に出して笑った。父に連れられ門をくぐる。その先の石段を登ると、さっそく出迎えがあった。

「パパスさん、お帰りなさい。一年ぶりですね」

「うむ」

「またうちに来つてくださいね。良い酒を用意してお待ちしていますから。旅の話を聞かせてくださいよ」

「ああ、楽しみにしていよ」

笑顔で話しかけてくれたのは村で唯一の宿屋と酒場の店主だった。丸々と太った身体にはどことなく、アランも見覚えがあった。

砂利道沿いに歩く。小川をまたぐ小さな橋を越えた辺りで、今度は大声に迎えられた。

「ようパバス！ 二年もどこまつつき歩いていたんだ！」

見るからにガタイの良いその男に、パパスは苦笑を浮かべた。

「はは。相変わらず威勢が良いな」

「つたりめーよ。アンタとはまだ飲み比べの勝負がついてねえんだ。付き合つてもらひづせ。ついでに旅先でのあれこれも聞いてやつからよ！」

「うむ。受けて立とう」

がつ、と拳を合わせる二人。口は悪いが、男もまたとても嬉しそうだった。「お、この子があのときの坊主か。大きくなつたなあと頭をぐりぐりされ、アランは恥ずかしいやら嬉しいやら複雑な気持ちになる。

すっかりずれてしまつた帽子を直しながら再び父の後ろをついていく。空は雲一つ無い快晴だ。曆の上ではもうすっかり春である。しかし。

「……くしゅん！」

「おお、風邪か。アラン」

「つづん。でも、何だかすこしさむいね」

「……うむ。確かに。季節はとつぶくに春だというのに、風が冷たい」

パパスが神妙にうなずく。道ばたでは季節外れのたき火をしている人がいた。そういえば来る途中の道沿いにあつた畠は、発育が遅れているのか少々寂しい見た目だつたことをアランは思い出す。

不思議なこともあるんだなあ、とアランは思った。

「パパス殿」

もうすぐ目的の場所といふところで、シスターに出迎えられた。

物静かな感じの初老の女性が、往来の真ん中でまつすぐにパパスを見つめている。

「よくぞ戻られました。」壯健そうで何より

「はい。皆には心配をかけました」

「これも神のお導きなのでしょう。……とまあ、堅苦しい挨拶は抜きにして」

突然、シスターがにっこりと笑つた。

「わーい、わーい。パパスさんが帰つてきた！ 嬉しいー！」

「シ、シスター……」

「うふふ。嬉しいことを我慢するのは良くないことですよ。さあ、お疲れでしょう。サンチョさんが」「自宅でお待ちですよ」
パパスはシスターに深々と礼をした。去り際、シスターがにっこりと笑つてアランに手を振つてきた。何だか嬉しくなつて、アランもまた満面の笑みで手を振り返した。

教会へと続く道の脇に、アランたちが目指す家がある。
質素だが立派な造りの家の前で一人の男が立つていた。その姿を見て、パパスとアランの表情が自然と緩んだ。

7・お姉さんな少女

「旦那様！ お坊ちゃん！ お帰りなさい！」

「サンチョ！ 今戻つたぞ！」

パパスが破顔一笑する。アランも満面の笑みで手を振つた。丸々と太つた身体を揺らしながら走つてきたのは、パパスの召使い、サンチョである。口ひげに小さな丸い目が印象的な、とても人当たりの良い男だ。孤高の人というイメージがあるパパスが唯一、彼だけは従者として認めている。サンタローズの家を留守にしている間は、彼が自宅の一切をきりもりしていた。

外見からは想像できないようなてきぱきとした動きでサンチョはパパスから荷物を受け取つた。久しぶりに逢えた嬉しさからか、目にはわずかに涙まで浮かんでいる。

「サンチョ、泣いてるの？」

アランが尋ねる。すると途端にサンチョの顔がぐしゃっと崩れた。「おお、おお、アラン坊ちゃんも！ 大きく、逞しくなられて。このサンチョ感激ですぞ」

「僕は元気だよ。サンチョはあいかわらず、すぐに泣いちゃうんだね」

「こら、アラン」

パパスが小声で叱り、アランが首をすくめる。涙を拭つたサンチョはパパスたちを自宅へと招き入れた。

簡素だが手入れと掃除の行き届いた居間。そこには先客がいた。

「あら、パパスさんじやないかい」

「ダンカンとこのおかみさんじやないか。お久しぶりです」

意外な来客にパパスが驚く。サンチョに負けないほど恰幅の良いおかみはからからと笑つた。

するとその影からひとつ今の女の子が顔を出す。

「ここにちは。おじさま」

「……？」

パパスは首をかしげる。見覚えがない女の子だつたからだ。

「この子は」

「ああ、そうか。パパスさんは初めてだつたつけ。あたしの娘だよ。ビアンカつてんだ」

おかみが紹介する。ビアンカと呼ばれた女の子は再び頭を下げた。柔らかそうな金髪を三つ編みにした彼女がにっこりと笑う様はとても明るく愛らしかった。どことなくお転婆そうでもある。

パパスとサンチョ、それからおかみが話を始めた。父の隣で所在なげに立っていたアランは、ふと裾を引かれて振り返る。ビアンカがすぐそばに立っていた。

「ね。おとなたちのお話が長そつだから、向こうに行かない？」

「う、うん」

「行きましょ！」

言ひが早いが、ビアンカはアランの手を引いて二階へと上がつていぐ。元気の良い子だなあ、と思ひと同時に、どこか懐かしい感じをアランは抱いた。

一階はパパスの書斎もかねた部屋だつた。壁際にぎっしりと本が詰まつた棚が置かれている。アランとビアンカは、少し高い椅子によじ登つた。

「じゃあ、あらためて血口紹介ね。わたし、ビアンカ。あなたはアランでしょ？」

「え？ 僕のこと知つているの？」

「うん。でも、おぼえてないのもしかたないよね。前に会つたときは、アランとつても小さかつたもの。知つてる？ わたしはあなたよりも一さいもおねえさんなのよ！」

血漫げに胸を張られた。アランが今六歳だから、ビアンカは八歳とことになる。だから懐かしく感じたんだとアランは思った。

「そうだ！『ご本読んであげる。ちょっと待つてね』

ぽん、と手を打つて、ビアンカは椅子から降りた。本棚から一番薄い本を取ってきて、机の上に広げる。が。

「えーと。…………？」

読めない。かるうじてふりがなの部分だけは拾い拾いして読んでいたが、それ以外はさっぱりのようだった。首を傾げ、むつかしそうに眉根を寄せて、何分もしないうちにビアンカはさじを投げてしまった。

「だめだわ。この『ご本、むずかしすぎるもの』

「そうだね。でもす『』や。僕はまだ、文字がせんぜん読めないもの」

「だつてわたしはおねえさんだもの。えっへん」

胸を張る。それからふたりして声に出して笑った。

「ビアンカー、そろそろ宿に戻るよ！」

階下から呼ぶ声にビアンカが「はーい」と答える。丁寧に本をしまってから、ビアンカはアランを振り返った。にぱ、と笑う。

「しばらくはサンタローズにいるから、またお話ししようね！ アラン！」

「うん。またね、ビアンカ」

手を振り合う。とんとんとん、と軽やかな音を立ててビアンカは一階へと下りていった。

翌日。

久しぶりに温かい食事と温かいベッドに包まれたアランは珍しく寝坊をしてしまった。田が覚めたときにはすでに太陽は高く昇っていて、眠い目をこすりながら一階に下りる。

居間にはパパスとサンチヨが揃っていた。

「坊ちゃん、おはよ「ひ」せいします」

「うん。おはよう、サンチヨ」

「久しぶりの我が家だ。ぐつすり眠れたか、アラン」
父の言葉に「うん」とうなずく。ふと、パパスが剣を携えていることに気がつき、首を傾げる。

「お父さん。どこかへ出かけるの?」

「ああ。村の外に出るわけではないから、夕方までには戻るつもりだ。……ではサンチヨ。行つてくる。アランを頼むぞ」

「はい。行つてらっしゃいませ、旦那様」

出かける父の後ろ姿を見ながら、アランはテーブルについた。すぐ温かなスープが出されたが、しばらくそれには手を付けず、アランはどことなく寂しそうにつぶやいた。

「……お父さん、村についても忙しそうだね」

「お父上には大切なお仕事があるのですよ」

「せつかくあそんでもらえると思つたのに」

テーブルの端っこに顎を乗せて頬を膨らませる。その様子にサンチヨは苦笑していた。

「さあさ、坊ちゃん。せつかくのスープが冷めてしまいますが」

「はあーい」

ぶーたれていたアランだが、久しぶりのサンチヨの食事にすぐに

機嫌を取り戻す。旅をしている間は粗食を余儀なくされたときもあつたから、育ち盛りのアランにとつてお腹いつぱいご飯が食べられることはとても幸せなことだった。

「「」ねうそたま！ ねえサンチョ、外であそんできてもいい？」

「ええ。外は良い天氣です。ただし肌寒いので、お召し物には注意してくださいね。あ、それから、くれぐれも危ないところへは行かれないよう」

「わかつてるよ。サンチョはしんぱいしようだなあ」

そう言つてアランは椅子から降りる。少し考え、アランは着ている服の上からさらに一枚薄地のマントを羽織り、あの親切なリスがくれた『ひのきの棒』を腰に下げる。

ちょっととした冒険者気分になつたアランは、「いつてきます！」と元気よくサンチョに言つてから家を出た。

途端に吹きつける冷たい風。そういうえば昨日の晩「ほんのとき、パパスとサンチョが農作物がどうのこうの言つていたことを思い出す。

「はやくあたたかくならないかな。みんな困つているの」「

雲一つない空を見上げながらつぶやく。

村の中心を通る砂利道まで出たところで、ふとパパスの姿を見かけた。ちょうど教会から出てきたところだ。パパスは足早に歩き始める。

お仕事のじやまをしちゃだめだ、といつ思いが一瞬アランの頭をかすめる。だが結局、父がどんな仕事をしているのかといつ好奇心の方が勝つた。こつそり後を追う。

するとパパスは川沿いにある民家のひとつへと向かつて行つた。玄関では老人がひとり待ち構えている。老人と一言、二言話をしたパパスは、そのまま民家の中へ入つていつた。あそこが父の仕事場なのだろうか、とアランは思う。

何をしているのだろう、お父さん。

さすがに他人の家の中まで追うわけにはいかないと思つたアラン

は、民家が見渡せる教会横の高台に向かつた。崖から落ちないよう、慎重に民家を見下ろす。

しばらくして、パパスが民家の裏口から出てきた。薪割りでもお手伝いするのかな、とアランは思った。しかし手に斧は持っていない。それらしい雰囲気はなかつた。

「……あれ？」

首を傾げる。

パパスは、一緒に出てきた老人に見送られ、川に浮かべてあつた小舟に乗つて上流へとこぎ出していったのだ。その先は大きな洞窟がある。すぐに、父の姿は洞窟の奥へと消えていった。

「お父さんのお仕事つて……どうくつのたんけん？」

一瞬、後を追つてみよつかなと思つ。だが舟なんかないし、第一危ないところへは行くなとサンチヨに言われている。

「むう……」

けれど、氣になる。

もやもやした気持ちを抱えたまま、アランはその場を後にした。

「そつといえ、ビアンカはまだサンタローズにいるんだつけ」

宿屋の前を通つたとき、ふとアランは思い出した。まだ胸のもやは抱えていたアランは、せつかくだからこつちから遊びに行こうと思った。

扉をくぐる。

「いらっしゃい……おや。パパスさんとこの坊主じやないか」

「ここにちは」

ペニリと頭を下げてから辺りを見回す。小さいながら小綺麗に掃除がされた室内の奥には、いくつかの部屋が続いている。だが当然のことながら、どこの部屋にビアンカがいるのか見ただけではわからない。

すると宿屋の主人が気を利かてくれた。

「もしかして、ダンカンさんとこのお嬢さんにお会いにきたのかい？」
「うん。」Jr.ちこまだいるつて聞いて。一緒にあそぼうと思つたんだ

だ

「なるほどね。ま、坊主にとつちや久しぶりに同じ年頃の子と会えたってことなんだろうなあ。いいよ、案内してあげる」

人の良い笑みを浮かべ、宿屋の主人が一階へとアランを連れて行く。

西側奥の、いちばん田端たりのいい部屋にビアンカたちは居ると
いつ。

「この寒さで、なかなか旅人がやつてこないからなあ。ウチとしては商売あがつたりだ。だけど、そんな中でもはるばるアルカパからやつてきたあのふたりは相当の大物……といつか強者だよ」

廊下で主人が言つ。そしてふいに声を潜めて、

「……でも今の話は、ふたりにはナイショだよ」

「うん」

「良い子だ。……つと、この部屋だよ坊主。すみません、おかみさん。いらっしゃいますか」

主人が呼びかけると、しばらくして扉が開いた。怪訝そうに首を傾げていたおかみさんは、アランの姿を見つけるなり表情を崩す。

「おや、アランじゃないか。もしかしてビアンカに？」

「うん。一緒にあそぼうと思つて」

アランが言つと、おかみは何故か複雑そうな顔をした。

「うーん。いつもなら思いつきり遊んでおいでと言つといふなんだけどねえ」

「？」

「あ！ アランだ。どうしたの？」

部屋の奥から声がある。ビアンカが小走りに近づいてきた。アランはどこかほっとしながら笑つた。

「こんなにちは、ビアンカ。あそびにきたよ」

「え、ホント！？」

「駄目だよビアンカ。 いつ薬が届くかわからないんだから」
表情を輝かせるビアンカにおかみさんが言つた。

「薬が手に入り次第、アルカパに戻るんだからね。 父さんが待つて
るんだよ」

「……うん。 「ごめんなさい」

「ねえ。 なにがあつたの？」

ビアンカが哀しそうな顔をするので、アランもまた哀しい気持ち
になりながらたずねる。 落ち込んではいられないと思つたのか、ビ
アンカはむりやり笑顔になつた。

「あのね。 アルカパにいるわたしのお父さんが病気になつちゃつた
の。 それで、よくきくお薬がサンタローズのどうぐやさんにあるつ
て聞いて、お母さんと一緒に來てたの。 でも、そのどうぐや
さんがなかなか帰つてこなくて、少しこまつてゐるのよ」

「かえつてこない？」

「お弟子さんの話じや、どうやら洞窟に材料を取りに出かけて帰つ
てきてないみたいなんだよ。 まあ、こいついう時がないわけじゃない
らしいし、大事ではないとは思つんだけどね。 ただあんまり日が経
ちすぎるとウチの人が心配だから、できるだけ早く薬を持って帰り
たいんだよ。 それでビアンカにもあんまり外には出ぬなつて言つて
いるのさ。 すぐに出発できるようになつてね」

そう言つておかみさんはため息をついた。

「誰か洞窟まで様子を見に行つてくれないかねえ……」

「お父さん」

ビアンカもどことなくしゅんとしている。

とても遊びに行けるような雰囲気ではなかつた。 アランはすゞす
ゞと部屋を後にする。

しばらくつづき加減で廊下を歩いていたアランは、ふと立ち止
まつた。 腰にさげてこる『ひのきの棒』を見る。

『誰か洞窟まで様子を見に行つてくれないかねえ……』

「……よし！」

アランは決意の表情で柄を握りしめた。

9・サンタローズの洞窟

川から流れてくる湿気が肌に冷たい。

緊張を解すため、大きく息をする。胸の中に入つてくる空氣は、外のものとは明らかに違つていた。

アランは今、洞窟の中にいる。

ビアンカたちの話を聞いて意志を固めたアランは、その足でここへ訪れたのだ。途中、入り口のところで門番代わりの男に呼び止められはしたが、特に追い返されることはなかつた。

「中は人が通れるようになつてゐるが、モンスターもいる。それでいいならおじさんは止めないよ」

そう言つてすんなり通してくれたのだ。

なるほど、彼の言つとおり、洞窟の中は点々と松明が灯され、足元も人が通りやすいようにならされてゐる。この洞窟で作業をする人のために整備されたのだ。

だが、それでもアランにとっては初めてのひとりでの冒険である。『ひのきの棒』を両手に握りしめ、アランは緊張の面持ちで奥へと進んで行つた。

アランの胸にあるのは、困つてゐるビアンカたちを助けたいという思いと、勇敢なパパスの息子であるという誇り。奥にいるであろうパパスのことを思ふと、若干だが勇気が湧いてきた。

サンタローズに来る前、船員に言われたことを思い出す。

『坊主は勇氣がある。新米ヒヨックの半分も生きちゃいないにもかかわらずだ。きっと大人になつたらどういふことをやつてのけるか』

「……こわくない。だいじょうぶ。僕がやるんだ」

かつん、かつんと洞窟の中に靴音がこだまする。どこか遠くで「キイ、キイ」という声を聞いたような気がした。間違いない。いく

ら整備されているとはいえ、ここにはいるのだ。モンスターが。

そのとき。

「ピキィーツ」

「つー！」

左手、岩陰からスライムが飛び出してきた。一匹。威嚇するように甲高い声を上げている。

だがアランは取り乱さなかつた。息を吸い、吐き、また吸い、吐く。

『ひのきの棒』を構える。要領はわかつていた。

「僕は……負けないつ。行くよつー！」

「ギュピィイイツ！」

荒い息をつく。

岩の一つに背を預け、アランは休息を取つていた。額に浮かぶ汗、しかし洞窟内が涼しいせいか、すぐに冷たく乾いてしまう。風邪を引いてしまうかもしれないなとアランは思った。

だがその表情は明るい。

最初のモンスター、スライムを撃破してからしばらくが経つた。その間、幾度も戦闘を繰り返し、その都度退けてきた。『自分は戦える』ということに密かな自信を深めていったのだ。

何より。

「アーホイミ」

短く、丁寧に呪文を唱える。

途端、掌に温かい光が集まり、戦闘で受けた傷を癒していく。

呪文とは世界から与えられた力だという。天賦の才を持ち、経験を積んで、その資格を得た者だけがそれにふさわしい呪文を使用することができる。

アランは最初に覚えることができた呪文が回復呪文ホイミであることに、胸がいっぱいになるほどの喜びを感じていた。パパスが自分を心配してくれた呪文、今度はそれをアランの方からパパ

すべとかけることもできるのだ。それはアランにとって、とても誇らしいことだった。

だが、嬉しいことばかりではない。

重なる戦闘で、リスからもらった『ひのきの棒』にひび割れが起きたのだ。

攻撃を空振りし、思いつきり指を叩いてしまったことが響いたのかもしれない。これではいつ使い物にならなくなってしまつかわらなかつた。

少しだけ悩んだ。

「きっとまだ、だいじょうぶ」

気が大きくなっていたアランはそのまま勢いよく立ち上がり、再び歩き始める。

右手にもつた武器が、ぱきり、と微かな異音を立てた。アランは気付かなかつた。

がこん、という妙な音が響いたのはそのときだ。

アランが振り返ると同時に、細かく砕けた石が高速で頬をかすめる。

「……っ」

緊張で身体が硬くなつた。それはアランにとって、初めて出会つたモンスターだつた。

身の丈はアランより低く、しかしその小さな手に持つのは巨大な木の鎧。どこか愛くるしい容姿とは裏腹に、闘争本能をみなぎらせた顔をしている。足元には、鎧で抉られた痕がくつきりと残つている。

『おおきづち』だ。

その小さな迫力に思わず唾を飲み込むアラン。たじろいだ一瞬の隙を突き、おおきづちはいきなり襲いかかつてきたり。

力任せに、大上段から木鎧を振り下ろす。

再び、がこん、という異音が響く。地面を叩いた音だ。

横つ飛びで攻撃をかわしたアランは、その威力に冷たい汗をかく。だがこれまで戦つたスライムや、こうもりの姿をした『ドリフキー』などと比べれば、攻撃が大味な分かわしやすかつた。

地面上にめり込んだ木鎧を引き抜くのに手間取つてゐる間に、アランは横合いから『ひのきの棒』を振り抜いた。

「いやああつ！」

手首から肘、肩、そして身体全体に伝わる確かな手応え。アランの攻撃を受け、おおきづちは吹つ飛んだ。

よし、やつた そうアランが思ったとき、おもむろにおおきづちが起き上がつた。そして何事もなかつたかのように再び木鎧を振

り上げる。その動きにはまるで変化がない。

効いてないのか。アランはたじろぎながらも、再び攻撃をかわした隙を狙つて武器を叩き付ける。

だがおおきづちは、まだ倒れない。

「……いたつ！」

手首に違和感。無理矢理叩き付けたせいで少しひねつたようだ。思わず、手首を押さえる。

おおきづちから視線を外した、その刹那。

「あつ」

気がついたときには目の前に木鎧が迫っていた。とつぜに『ひのきの棒』を構え、攻撃を受け止める。

武器が、おおきづちの攻撃を受け止める衝撃。

直後、『ひのきの棒』は真ん中から粉碎された。木鎧の勢いは止まらない。そのまま振り抜かれた

腹に直撃。

「……かふつ」

ふわ、と身体が浮いた。

ぐるん、と世界が反転して。

息も吸えないまま地面に叩き付けられた。

痛恨の一撃。

「げほつ、げほつ。『じほつ！』

まともに息ができない。苦しさから手に力が入る。折れて使い物にならなくなつた『ひのきの棒』が手の中にあつた。

「げほげほつ、……つ！」

その攻撃を前転でかわせたのは、ほとんど偶然に近い。

アランは苦しさから逃れようと無理矢理息をするが、うまくいかない。涙がにじんだ。

おおきづちの動きには、やはり変化がない。

手にした木鎧をぎゅっと握りしめたのがわかつた。

アランの頭はその瞬間、真っ白になった。

「う、うわあああああああつ！」

逃走。全力で走った。

ずきん、ずきんと腹が痛む。実際はアランが思うほど足は動いていなかつたのだが、必死のアランはそのことにも気付かない。とにかく、立ち止まつたらやられてしまつと思つた。

どれくらい走つただりつ。

ついに身体の方が首を上げて、アランは座り込んだ。そこがちょうど湧き水の湧いているところだから、アランは無我夢中で水を口にする。爽やかで、微妙に甘みのある水に混じり、何とも言えない苦みが口の中に広がる。それが血の味だとアランは初めて知つた。

岩に背を預ける。

そして思い出したかのように、自らが走つてきた通路を見た。

おおきづちは、追つてこなかつた。やぶれかぶれの逃走は、何とか成功したようだつた。

「ふうう……」

腹の底からため息をつく。そして攻撃を受けたお腹をさすつた。わずかに痛みが残るが、思つたよりひどくない。さつき水を飲んだおかげか、気持ちの方はかなり楽になつていた。

ホイミをかける。だが呪文を唱えたのも束の間、傷が癒えきる前に癒しの光は消えてしまった。どうやら精神力の方が切れかけているらしい。

おそるおそる、手を見る。そこにはまだしっかりと、折れた『ひのきの棒』が握られていた。

武器もない。

呪文もしばらく使えない。

いや、それより。戦闘から逃げた自分を、パパスはどうだろうか。そのことの方が心配だつた。

憧れの父なら、こんなときどうするだりつた。

アランはじつと、天井を見つめていた。

そのときだ。アランの身体が再び固まる。聞こえたのだ、あの甲

高い声が。

「キュイツ！？」

間違いない。スライムだ！

アランは唾を飲み込んだ。血の味は、まだ消えていなかつた。

「キュイッ！ まつて、いじめないで！ ボクはわるいスライムじゃないよ」

「……え？」

折れた『ひのきの棒』を構えたアランは、突然ひとの言葉を喋り始めたスライムに呆然とした。

ぼよん、ぼよん、と地面を跳ねる姿はまさしくスライム。けれどよく見ると、その大きな目に宿る光がどことなく優しそうだった。スライムはアランの姿に驚いたのかしばらく離れたところにいたが、やがて親しげに近づいてきた。

「うん。キミはわるいひとじゃないんだね。なんとなくわかるよ」「えっと。スライム、くん？ 韻はどうして言葉がわかるの？」

「ボク、ときどき『うん』『へん』『よく』『さん』たちとながいいいんだ。『はん』をもじつたり。ことばはしじんにおぼえつけた」

「そつか。じゃあ君はわるいスライムじゃなくて、しょくにさんたちの友達なんだ」

「そう！ ともだち！ ともだちだよ！」

スライムは嬉しそうに一回転した。その可愛らしい仕草に、アランも疲れを忘れて微笑む。するとスライムは少し声を落として聞いてきた。

「ところで、キミ、おおきびちにいじめられていたみたいだけど、だいじょ「うふ」？ あのひとたち、ぜんぜんてかげんしてくれないから」

「うん。ひどいケガはしないんだけど……見てたの？」

「『めんな。ボク、とってもよわっちこから、たすけにいけなかつたんだ。それに、ボクはひとつなかよくしているから、おなじスラ

「イムからなきらわれていいんだ」

「そんな！ こんなにいい子なのに。ひどいよ」

「でも、ここにいればよくにこんさんがきてくれるから、さみしくはないよ。ですがにひとのすんでこるとこまでは、いけないけれど……」

「そつか……」

アランはうつむく。モンスターと仲良くできることアランにとってとても嬉しい発見だったが、そのせいでモンスターの仲間と離ればなれなのは寂しいと思つたのだ。

「ねえスライム君。僕と友達にならない？ 僕はアラン」

「アラン！ いいなまえだね！ でもこまつたな。ボクはきましたなまえがないんだ。じょくにんさんはいるなんよびかたをしてくれるし……スラリンとか、スラぼうとか……でもスライムくんつてよびかたはいいな！ それにしてね」

「う、うん。わかったよ、スライム君」

苦笑いしながらアランは思う。もし自分がこのスライムのような友達を他に持てたとしたら、その子ともずっと仲良くしてこい。

「そういえば、じょくにんさん、だいじょうぶかなあ

「どうしたの？」

「うん。ちよつとまえにね、じょくにんさんがこのひとつひとつてきたんだけど、まだかえつてきてないんだ。こつもならひとつにかえりのあいさつによつてくれるのに」

「それって、お薬を作つてこるじょくにんさん？」

「そう！ ひげもじやだけビ、とつてもやせしこひとなんだ。しつてるの？」

「会つたことはないんだけど……帰りを待つてこるひとがいるんだ」

「それはいけないね。たしかあつちのおくのほつこいつたとおもうよ。ちよつとまえにらぐばんがあつて、おおきなあなたがいるからあぶないよって、おしえてくれたんだ」

「そつか。わかった、ありがとう。スライム君」

アランは立ち上がる。意氣揚々と歩き出すとしたとして、ふと、手元に残った武器に気がついた。

「あ……でも、僕にはもう戦うための武器がないんだつた。どうしよう。一度戻つた方がいいのかな?」

「ふき? ふきならあるよ」

「え? ほんと?」

「ひづち

そう言って、スライムはアランを奥へと導く。岩の陰に隠れるよう、それは置いてあつた。

「これだよ。しょくにんさんがつかつてたんだけど、もうござらないからつてボクにくれたんだ。でもボクにはつかえなくて、こまつてたんだ」

「これって、『かしの杖』……かな」

アランの身長よりも大きな杖だ。触つてみるとずつしりと重く、温かな木の感触に比べてとても硬い。これならば、ちょっとやせつとで折れることはなさそうだつた。

「ちょっと重いけど、なんとかなりそう。ありがとう、スライム君!」

「どういたしまして。きをつけたね。あいつら、きっとまたおそつてくるだろうから。しょくにんさんにようしぐね」

ぴょんぴょん跳ねながらスライムが別れの挨拶をする。洞窟に入つて以来の満面の笑顔で手を振りながら、アランはその場を後にしてた。

12・負けないよ！

地面を荒く削つてできた階段を下りる。「「ほん」とアランは軽く咳をした。

何やら砂埃が舞つている。壁に備え付けられた松明の光に照らされ、細かな粒がきらきらと舞つていた。

奥で声がする。呻き声のようだ。

『かしの杖』を抱えながらアランは走つた。折れ曲がつた道の先是広場になっていた。天井は高く、時折細かな砂が落ちる。漂つていた砂埃の正体はこれだったのだ。

その真下、ちょうど広場の中央に、大きな岩が転がつていた。呻き声はその下から聞こえてくる。

「おーい、おーい

「だ、だいじょうぶ?」

「おおっ。助けに来てくれたのか！」

アランが駆けつけると、岩の下で横たわっていた男が歎声を上げた。初めアランは、男の下半身が丸々下敷きになつていると思い顔を青くしたが、男はあつけらかんとした表情で言つた。

「帰ろうとしたら上から雪が降つてきてなあ。『ご覧の通りの有様で動けなくなつていていたんだ。ああいや、心配するな。わしがはまつたのはちょうど窪みになつたところ。運良くペしやんこにならずに済んでるよ。ただ抜け出そうとして腹がつかえてしまつてなあ』

「えつと。お薬を作つていいしょくにんさん?」

「いかにも。まさかお前さんのような小さな子が来てくれるとは思わんかつた。勇気のある子じゃ」

下敷きになつたひげもじやの男に言われ、アランは苦笑しながら頬をかいた。

男は逞しい腕を伸ばし、下から岩を押し上げる仕草をした。

「お前さん、ちょっと手伝ってくれんか？ もう少しでどかせそつなんだ」

見ると、少しだけ岩が浮いている。地面の凹凸を利用すれば、確かに転がしてどかせることができそうだ。アランは言われたとおりに岩に手をかけた。

「いいか？ いちにのさん、で行くぞ。それ、いち、この」「さんつ！」

渾身の力を込める。ぐら、と岩が傾いたかと思うと、次の瞬間に大きな音を立てて岩は転がった。「ふいー、助かったわい」と言いながら男が立ち上がる。

「ありがとう、礼を言つよ。ずいぶん力持ちなんだなあ」「つうん。そんなことないよ。おじさんが力持ちなんだ」「ははははは。……おっと、こつしちゃいられない。急いで帰らなければ。ではな、坊主！ お前も早く戻るんだぞ！」

「あっ、おじさん！」

言つが早いか、男はあつといつ間に走り去つていった。小太りな体型に似合わない俊敏な動きだった。あれでどうして岩の下敷きになつたのか、もしかしたら結構どじな人なのかもしない。

くすり、とアランが笑つたときである。

「うわああっ」という男の悲鳴が洞窟内に響き渡つた。アランは『かしの杖』を握り、慌てて駆け出した。

階段のふもとで男が立ち止まつている。彼の前に立ち塞がつていたのは

「おおきづち……」

顔を強ばらせるアラン。

武器である大きな木鎌を振り回しているのは、まさしくおおきづちだった。

がつんつ、と威嚇するように地面を叩く。相変わらずの力だった。しかも一匹ではない。二匹。上へ登る階段を塞ぐように立つてい

る。

「「いつやあ……まこつたな。わすがに今のわしどせ!!」回歸せ……」

「さがつて、おじさん」

決意の表情でアランが前に出る。男は驚きの声を上げた。

「まさか、戦つつもりか？」

「うん。この子の仲間とは一度、戦つているんだ。……まけむやつ

たけど」

「それなのに戦つつもりなのかい、坊主!…」

「うん。だつて、上げてばかりじゃ、お父さんをがつかつてやるやうから。それにおじさんも守らなことね」

アランは身長よりも大きな『かしの杖』をおおむね手に向けた。

「……今度こそ、まけないよー。」

おおきづかがこきり立つたように襲いかかってきた。

飛び上がった一匹を追いかけるように、残りの一匹のおおきづちもまっすぐアランに突進してくる。

統制が取れた というより、我慢できずに各々が勝手に飛びかかってきたという感じだ。アランは横つ飛びにかわした。勢い余つたおおきづちはたらを踏む。

アランは力強く踏み込んだ。全身を使って、手にした『かしの杖』を振り回す。

ぴりつ、と脇腹が痛んだ。

「くうつ！」

それでも武器を手放さず、アランは振り抜いた。

空気を押しのけ、硬い杖の先端がおおきづちの身体を打ち据える。鈍い音が響き、おおきづちが吹き飛んだ。他の一匹を巻き添えにして、壁に叩き付けられる。

「坊主、危ないっ」

職人の男が声を上げる。無事な一匹が横合いから木鎧を振りかぶつていた。

『かしの杖』はアランの身体よりも大きく、重い。一度大振りしてしまうと構え直すのに時間がかかる。その隙を突かれた。嫌な記憶がアランの頭をよぎる。あれを頭に受けたら と考え、身体が一瞬固くなる。

アランは叫んだ。自らを鼓舞し、無我夢中で『かしの杖』をそのまま振り回し続けた。先端で円を描き、踏み込むと同時に真上から打ち下ろす。

木鎧と真正面からぶつかり そのままはじき飛ばす。

『かしの杖』はおおきづちの頭頂部を直撃した。鈍い感触が両手

に広がる。

おおきづちは倒れたまま動かない。もしかしたら隙を見て立ち上がりてくるのでは、とアランは思つたが、すぐにおおきづかの身体は粒子となって消えていった。

全身の力が抜ける。直後、思い出した。

「そうだ、あといつぴき！」

慌てて武器を構え直そうとするが、気が緩んでしまったのか全身に力が入らなかつた。

早く、早く　自らを急かしながら、何とか杖を持ち上げる。顔を上げた。

「……あれ？」

「逃げたよ。つこわつきな」

安心したような、呆れたような声を出し、職人の男がアランに声をかけてきた。

「それにしても見事だつたぞ、坊主！　まさかその年で、おおきづち三回を退けるとはのお…」

「……うん。僕もちょっと信じられないかも。あ、そうだ！　おじさん、ケガはない？」

「おお。お前さんのおかげでピンピンしとるわ。世話をかけたの」「よかつた……」

息をつく。すると今度こそ脱力で立つていられなくなつた。尻餅をつき、『かしの杖』を落とす。

男が手を差し伸べてくれた。

「よく頑張つたな。ここから先はわしに任せや」

「え？」

「子どもひとりにいい格好ばかりさせられん。出口まで送つていくよ。それに……ほれ。なかなか言えんぢやない。おの下敷きになつて子どもに助けられ、道中もその子に送つてもうございました、なんて」

「…………」

思わずアランは吹き出す。男はひげもじやの顔に苦笑を浮かべた。

「よし、モーゲ」

男はかけ声とともにアランを背負う。アランはびっくりしながらも、かつてパパスに肩車してもらったときのこととを思い出して嬉しくなった。

「モンスターから逃げ出したこと、これでお父さん許してくれるかな」

「はて。お前さんの父親は」

「パパスって言つんだ。とてもつよいんだよ」

「パパス……おおっ！？ 坊主、あのパパス殿の息子さんかい！？
いや、どうりで強いわけだ！」

「えへへ」

アランは頬をかいた。しみじみと男は言つ。

「えして立派な親を持つた子ほどこか難しい」というを心に抱え込んでいるものじゃが、お前さんは違うようじやな。心配せんでもええ。パパス殿ならきっと許してくれる。胸を張つて、強く生きる事だ」

「うん」

「よし。いい子だ」

男は笑つた。

こうしてアランは初めてのひとつ冒険を無事、乗り切ることができたのであった。

「聞いたぞ、アラン」

職人の男とともに無事、洞窟を抜けたその夜。

少し切れていた口の痛みを我慢しながら、夕食のスープを飲んでいたアランに、パパスが声をかけた。思わずびくり、とアランは身体を震わせる。

何となく、怒られると思ったのだ。

落ち着いて考えればちょっと無茶なことをしたかなと自分でも思う。それに、アランは一度モンスターの前から逃げ出してしまった。パパスにはそのことを云えていない。何となく、後ろめたかつたのだ。

恐る恐る顔を上げる。父の顔は怒ってはいなかつた。いつもの精悍な顔に、どことなく呆れたような表情を浮かべていた。

「親父さんから聞いたぞ。ひとりで洞窟の奥まで入つていったそうじゃないか」

「い」「ごめんなさい」

思わず頭を下げる。するとパパスは「ふつ」と笑つた。

「まあ、無事に帰つてきたのだ。よくやつたな
「え？」

呆然とするアラン。サンチョが困惑の声を上げた。

「しかし旦那様、私は気が氣じゃありませんでしたよ……。お昼になつても坊ちゃんは帰つてきませんし、帰つてきたら帰つてきただ怪我をされていたじやありませんか。もう私は心配で」

「はつはつは。相変わらずお前は心配性だな。あの洞窟はモンスターが出てるが、村人も入る整備された場所だ。確かにひとりきりで入つたのは感心せんが……何事も経験だ」

「はあ…… わよウで」ゼロこますか

「そつとも」

「あ、あの。お父さん」

アランの呼びかけにパパスが振り返る。しばらくくつむいてもじもじと手を合わせていたアランは、意を決して告げた。

「僕……モンスターからにげちゃつた。こわくなつて、痛くて……。

お父さんなら絶対ににげないはずなのに。僕、お父さんのこどもなのに」「

「それは本当か、アラン?」

「……うん

「そうか」

深くうなずくパパス。今度こそ、アランは叱責を覚悟した。

「それはますます、お前のことを見直さなければならないな。アラン」

「……？」

「人間、誰しも怖くなるときがある。強大なモンスターの前には敗れ去ることもあるだろ？ そんなとき大切なのは、命を粗末にしないことだ」

「それって」

「逃げたことを気にしているのなら、それは筋違いということだ、アラン。時には逃げて、自分の身を守る必要もある。生きていれば再戦の機会もあるだろ？ それがさらなる成長へと繋がることもある。だが死んでしまっては、元も子もないのだ」

「お父さん……」

「大切なのは生き残ること、生き残る意志を持つことだ。……しかし」

そこでふと、パパスは遠い目をした。

「時には、たとえ命を捨てることになろうとも戦わなければならぬときがある」

「旦那様……」

何かに思い至ったのか、サンチヨの声が沈んだ。

パパスがスプーンを置いた。真っ直ぐにアランを見つめる。

「アランよ」

「はい」

「逃げるなとは言わない。だが自分が何のために戦っているのか、何のために生きようとしているのか、それは忘れてはならぬ」

「……」

アランは頭を伏せた。父には申し訳ないが、アランには難しそうな内容だった。ただ、自分のしたことが間違っていたなかつたということだけは、何となく理解することができた。神妙にうなずく。パパスが破顔一笑した。

「そろそろ、お前にも剣の稽古をつけなければならなくな。まだ小さいと思っていたのに、月日が経つのは早いものだ。まあ、しばらくなは子ども用のナイフからだが」

「お、お父さんっ」

「はははは」

頬を膨らませるアランの前で、パパスは気持よさうに笑っていた。

翌朝。

アランはパパスに呼ばれ宿屋の前に来ていた。「出かける用意をするように」の言葉通り、いつも外套と帽子を被っている。いつも違うのは、その背に大きな『かしの杖』を背負っていることだ。けど、何で宿屋なんだろう アランは首を傾げながら父が出てくるのを待っていた。

しばらくして、パパスが宿屋から出てきた。後ろに誰かを連れている。

「あ、アラン！ ジャあアランもいつしょに行ってくれるの？」

「ビアンカ？ いつしょに？」

アランは目をしばたかせた。彼女の後ろには母親であるおかみさんもいる。

パパスは言った。

「親父さんが帰ってきたことでおかみさんも無事、薬を手にすることができた。これからアルカパへ帰るそうなのだが、やはり女一人では心許ない。そこで私が送つていくことにしたのだ」

「すまないねえ、パパスさん。いつもいつも」

「なに、気にしないでくだされ。……そういうわけでアラン。お前も一緒に連れて行こうと思うのだ。いいな？」

「うん。わかった」

「やつた。アランといつしょだ」

無邪気に喜ぶビアンカ。アランも嬉しくなつてつい笑つた。

では早速行くとしよう、というパパスの声かけとともに、アランたちはサンタローズを出発した。

「ねえねえ」

村を出てすぐ、ビアンカが声をかけてきた。その顔には何やら嬉しそうな、それでいてどことなく意地の悪そうな笑みが浮かんでいる。

「ビババの奥で、おじさんを助けたってほんと?」

「うん。ほんとだよ」

特に嘘をつく理由も見あたらなかつたので、アランは素直に認めた。昨晩のパパスの話もあつてか、そこに威張るような仕草はなかつた。ビアンカがきょとんとする。

「ほんとにほんと? わたしてつきり、おじさんがアランを助けたのかと思つてた。それでアランがえっへんつて胸をはつてるんじやないかつて」

「ひどいよビアンカ」

「えぐ。じめん。でも本当みたいだね、せっせの話。うん、す、じいよアラン!」

今度は手放しで讃めてくれた。満面の笑みを見ると、今更ながらに恥ずかしくなる。

それからしばらく、アランとビアンカは洞窟での話や、そこでアランが手に入れた『かしの杖』の話で盛り上がつた。子どもたち一人が仲良くおしゃべりしている様子を見て、二人の親は頬を緩めた。ふと、アランやビアンカには聞こえない声でおかみさんがつぶやく。

「これは将来が楽しみだねえ、ふたりとも」

「ん? 楽しみ、とは?」

「大きくなつたら立派で格好いい子に育つよ、アランは。親の私が言つのも何だが、うちのビアンカもあれで結構な器量よしだ。大きくなつて、ふたりがずっと一緒にになつてくれたなら私も安心なんだがねえ」

「はは。まだまだ先の話ですぞ」

「おや。子どもの成長なんか、親が考えるよりずっと早いものだよ。今から将来のことを考えたつて、バチなんか当たりやしないさね」

「むう……」

想像したのだろう。パパスの表情が複雑なものになつた。
「確かに伴侶を持つことはとても大切なことだ。だが私はひとりに腰を落ち着けぬ身。おそらくアランも同様だろう。いかに仲がよいとは言え、それは相手にとつてつらい思いをさせることにはならないだろうか」

「何を言つてるんだい。そういうのは余計なお世話つていうんだよ。パパスさん」

「むむう」

「そんなに難しく考えなくたって、なるようになるもんさ。もしかしたら相手だって喜んで付いていくかも知れないじゃないか。大切なのはお互いの気持ちさ。ま、ビアンカはあれで結構なお転婆娘だから、トラブルや冒険にはむしろ目の色輝かせるかもしれないがねえ」

「おかみさん……」

「というわけでパパスさん。そのときはひのびのビアンカをよろしく頼むよ」

「ばん、と派手に背中を叩かれ、パパスは呻いた。

その様子を一人の子どもは不思議そうに眺めていた。

「アルカパだーつ。お母さん、早く早く！」

「ビアンカ。あんまり急ぐと転ぶよ」

「お父さんに早くお薬持つていつてあげなきや！」

草原の先、サンタローズと同じように森に囲まれた場所にアルカパはあった。先を行くビアンカたちの後ろ姿を見ながら、パパスがつぶやく。

「ビアンカは心優しい子なのだな」

「うん。ビアンカはやさしいよ」

アランがうなずくと、なぜかパパスは苦笑を浮かべた。首を傾げるアランに、パパスは「何でもない」と答えた。

街に入ると、綺麗に整備されたレンガ造りの道がまっすぐに延びていた。道沿いの建物はみな立派な造りで、サンタローズと比べるととても大きな街だということがわかった。アランは素直に驚く。

「すごいね、アルカパつて」

「うむ。この辺りでは一番大きな街だろ？」

「ここよりもっと大きなまちがあるの？」

「あるさ。少し遠いが、ラインハットはここよりもさらに大きい。世界にはまだまだたくさんの街があるのだ」

「うわあ……。僕もいつかいきたいなあ……」

物珍しさからアランはきょろきょろと辺りを見回す。晴れ渡った空から降りてくる風は心地よく、歩くたびにこつこつと鳴る石畳が楽しくて、アランは笑いながらスキップをしていた。

しばらく歩くと、突き当たりに大きな建物が見えてきた。周囲の建物が二、三軒入ってしまいそうな程の大きさだ。アランは思わず立ち止まり、口をあんぐりと開けた。

「あれがビアンカのご両親が開いている宿屋だ」

「えつ！？ あれがビアンカのおうち…？」

「待たせては申し訳ない。急ぐぞ、アラン」

パパスに連れられ、扉をぐぐる。初めて聞くような重厚な音がした。

建物の中に一步踏み入れた途端、外とは違う空気がアランの肌に触れた。どこか暖かみがある、不思議な感覚だつた。

受付カウンターを横切り、奥にある部屋へと向かう。そこがビアンカたち家族の居室だつた。入つてすぐ、ビアンカがパパスたちを奥へと案内する。

「いま、お母さんがお薬をあげています。おはなしもできますよつて、お父さんが」

「うむ。ありがとう」

ビアンカの案内で寝室に入る。おかみさんに介抱され、宿屋の主人が横になつていた。

「ごほ……おお！ パパパスじゃないか……『ごほ』『ごほ』

「ほりあんた。まだ薬を飲んだばかりなんだから、安静にしてな」「ダンカン。具合はどうだ？」

「なに、ただの力ぜさ。心配かけてすまなかつたな……『ごほ』『ほつ』

「ウチのひと、気は大きいのに身体が弱くてねえ。まったく情けない」

「はは。しかし大事ではなくて安心した。サンタローズの薬はよく効く。おかみさんの言うとおり、安静にしているのがいいだろう」「ごほ。それよりパパス、今度の旅の話を聞かせてくれないか

旧知の仲なのか、話が盛り上がるパパスたち。邪魔をしては悪いとアランはそつと寝室を出た。同じように部屋の外で大人しく待つていたビアンカと顔を合わせる。彼女は肩をすくめた。

「やっぱり、大人たちのお話つてながいのよね」

「うん。でもしかたないよ。ひさしぶりに会つたんだから」

「お父さん、寝込んでからはあんまり笑わなかつたけど、いまはとつてもうれしそう。だからそつとしてあげましょ。……あ、そうだ。

アラン」

ビアンカが手を合わせる。

「もしお外に行くなら、いつしょに行きましょ。アルカパの街を案内してあげる」

「え？ ほんと？」

「うん。お薬のお礼もしなきゃ」

満面の笑顔を見せるビアンカに、アランは喜んでうなずいた。

金髪のお下げが歩く度にぴょこぴょこ揺れる。

ビアンカの後ろを歩くのは楽しい。色んなものが新しく見える
「？ どうしたのアラン」

「ううん。何でもないよ」

振り返つたビアンカにアランは手を振つて見せた。まさかビアン
力の後ろ頭を見ながら楽しんでいたとは言えない。

もちろん、それ以外にもアランにとってアルカパの街は十分以上
に新鮮だった。

まず、街を歩く人の数が違う。サンタローズも季節によつて村人
の服装は変化するが、アルカパの人々は色とりどりの服を身に付け
ていた。だが、毒々しいほどの派手さはない。品がある、とても言
おうか。旅人も訪れるのだろう。時折、鎧兜に身を包んだ大男も通
る。

建物の大きさはすでに目抜き通りで体験済みだが、よくよく見る
と建物の大きさもさまざまだ。平屋建て、窓も少ししかないごじん
まりした家もあれば、大きな煙突からぽつぽつと煙を出し続ける家
もある。もちろん、ビアンカの家である宿屋が街の中で一番大きい。
そして何よりアランが驚くのが、道ばたに植えられた綺麗な花々
の数だ。特に街の中心部にある教会の周囲には、教会をぐるりと囲
むように色とりどりの花が植えられている。春の陽気に似つかわし

くない寒さに襲われているのはアルカパでも同じはずだが、少なくとも見た目においては寒々しさとは無縁だった。

都会都會しているわけではなく、さりとて寒風吹きすゞぶ田舎でもない。不思議な調和を保つた街だった。

道具屋、武器屋などを冷やかし、教会のおじいさんの長い話に苦笑いを浮かべ、酒屋のお姉さんに「逢い引きだ」とよくわからない単語を言わながら、アランはすっかりこの街に魅せられていた。だが 街の南にある小さな広場にさしかかったとき、初めてうきつきした気持ちにかけりが差した。

猫が唸り声を上げている。明らかに警戒し、威嚇する声だった。アランと同じじか、それより少し年上の少年が二人、猫を取り囲んでいた。彼らは手に持った棒で猫を突ついている。猫はさかんに威嚇の唸りを上げているが、いかんせん身体が小さい上、弱っているのか声自体に力がない。首に巻かれたひもが広場に突き立てられた棒に繋がれ、身動きが取れないようだった。

彼らの姿を見た途端、ビアンカが声を張り上げた。

「こらあつ！ 何やつてんの！」

「げ、ビアンカ！？」

少年の一人がびくりと肩を震わせる。それに構わずビアンカはわずかずかと彼らの側まで近づいた。びしり！ と眼前に指を突きつける。

「そんな可愛い猫さんいじめて、何が楽しいの！」

「いや、だつてなあ」

「こいつ、面白い声で鳴くんだけ」

言つが早いが、少年が棒で猫をつつく。すると「ふがなあおひ…」という鳴き声が漏れる。

やめなさい、とビアンカが言つより早く、アランは少年から棒をひつたくつた。むつとする少年を真正面から睨む。少し相手がひるんだ。その様子をビアンカが驚いた表情で見つめる。

アランは猫に目を向けた。どこかで迷ったのか、身体は泥だらけ、

毛並みは乱れ放題、身体もどこかげつそりしてこる。

だがアランは眉をしかめることもせず、ただじっと猫を見つめた。

猫もまたまっすぐにアランを見返す。

綺麗な目だな、とアランは思った。心の中で語りかける。

君は、誰？

どこから來たの？

僕と友達になれるかな？

「……アラン？」

ビアンカに声をかけられ、我に返る。猫との間に少年たちが割り込んだ。

「と、とにかくこいつは俺たちが見つけたんだ。俺たちのだ

「何言つているのよ。いまスグはなしなさいー」

「えー……」

「うーん。じゃあ、こうしようぜー！」

いかにも答案、といつ風に少年が手を叩く。

「お化け退治やー！」

「え？」

「アルカパの北にお城があるのは知ってるだろ？　そこに出るんだつてさ。夜な夜なお化けがや。やいつらを追いはらつたら、この猫はあげるよー！」

「それはいいな！　お化け退治だ、お化け退治ー！」

「い、いいわよ。そのかわり、お化けを退治できたらちゃんと猫ちゃんははなしてあげるのよー！」

「うん。わかった」

売り言葉に買い言葉か、ビアンカが怒り心頭に宣言した、その脇で。

アランはじっと、猫の瞳を見つめていた。猫もまた唸り声を上げるのをやめ、じっとアランを見つめていた。

ほり、行くよ　とビアンカに襟首をつかまれ、引っ張られる。去り際、猫が「なあん……」と小さく鳴く声が聞こえた。

襟を引っ張られるままだつたアランは、ふとビアンカが宿とは反対方向に歩き出したことに気付いて声を出した。

「ビアンカ、もしかして今からいくつもり？」

「決まつているじゃない！ 猫ちゃんを助けなきやー。」

「それは、そうだけど……」

アランは言葉を濁した。怖じ氣づいたわけではない。ただサンタローズでの洞窟探検の経験が、そのまま何の備えもなくお化けがいるという場所へ向かうことにためらいを感じさせたのだ。

ただ、アランも正直なところはビアンカと同じ気持ちだ。あの子を助けてたいと思う。それも、とても強く。

「おや、おふたりさん。どこへ行くの？」「.

街の出入口まで来たといひで、門番の兵が声をかけてきた。さりげなくアランたちの行く手を塞いでいる。ビアンカは両手を腰に当てて声を荒げた。

「猫ちゃんを助けるのー。」
「通して、門番のおじさんー。」

「何を言つてゐるのかよくわからないが、外は危険だ。子どもふたりだけで外へ出すわけにはいかないな。さあ、お家に帰りなさい」
やんわりとした口調ながら、断固として通そうとしない。サンタ

ローズのおじさんとは全然違うなとアランは思つた。

「うううー、と隣でビアンカが唸る。すると突然、彼女は駆け出した。あわわーとか、門番の股の下をぐぐって抜け出やうとする。…が。

「ひひひひ。レティがそんなことをするのは感心しないな」
ひょい、と首根っこを押さえられ、そのままアランのもとまで連れこられる。やたらと慣れた手つきだった。

「まったく。相変わらずお転婆だなビアンカちゃんは。そんなこと

だと大きくなつてお嫁にいけないぞ？」

「ほ、ほつておいて！」

頬を膨らませてビアンカが言つ。顔を赤らめているところを見る
と、本人は結構気にしているのかも知れない。

押し問答も効果はなく、ふたりは渋々その場から引き下がつた。
「どうしよう……」これじゃあ外に出られないわ

「うーん。大人の人にたのんだらどうだらう？　お父さんと一緒に
ら、あのおじさんも通してくれるかも」

「ダメよ！　大人と一緒にお化け退治をしたら、あいつらゼッタイ
猫ちゃんをはなしてくれないわ！　どうせお前らがやつつけたんじ
やないだらう、つて！」

ビアンカの言つことももつともだつたので、アランは黙り込んだ。
ふたりして頭を悩ませている内にビアンカの家に辿り着く。彼女
はため息をついた。

「こうなつたら仕方ないわね。アラン」

「なに？」

「今日は何が何でもうちに泊まつてもらうよ、お父さんたちに言
つてみる。当然、アランも泊まるでしょ？」

「そうなると思つけど……あ」

あることに思い至つたアランは口元を押さえた。

「まさかビアンカ、夜にこつそりぬけ出すつもりじゃ

「うん、正解。よくよく考えたら、お化けって夜出るものじゃない
？　だつたら退治も夜しかできないかなつて」

「……そう、だね」

アランはうなずく。二人は真剣な表情で額を合つた。

ちょうどそのとき、奥の扉が開きパapasたちが出てきた。アラン
とビアンカの姿を認めると微笑む。

「おお、帰つていたか。すまぬなビアンカ、アランに街を案内して
くれていたのだろう？」

「気にしないでください、おじさま。私こそ、とても楽しかつたで

す

「はは。このお礼はまたいづれしなければな。……ではアラン、そろそろサンタローズに帰るとしよう」

パパスの言葉に、アランもビアンカも固まる。何と言おうか一人が悩んでいると、思わずこうから助け船が来た。ビアンカの母親だ。

「そんな！ もう帰つちまうのかい、パパスさん！ 一泊ぐらじていつてくださいな」

「うーむ……」

パパスがちらりとアランを見る。ビアンカに肘でせつつかれたアランは、急いでこくこくとうなずいた。パパスが再び笑う。

「……では、『厄介になろうか』

「はーーー、わあわー、いらっしゃへどづ。ちょうど良い部屋が空いているんですよ！」

嬉しそうにパパスとアランを案内するおばさん。パパスに手を引かれ歩き出そうとしたとき、アランの耳元でビアンカがそつとつぶやいた。

『それじゃ、夜にね』

『うん。わかつた』

外の喧噪が細くなり、やがて消え、夜が来る。

パパスとアランが案内された部屋は、親子二人が寝るには少々広いくらいだった。良い部屋が空いているといつおかみさんの言葉は、なるほどその通りだった。

だからこそアランはなかなか落ち着けず、寝台の中でしきりに寝返りを打っていた。

何度目だろうか。パパスに背を向けるように寝返りを打つたとき、入り口の扉がゆっくりと開いた。

「……アラン」「

ビアンカがゆっくりと寝台に近づき、声をかけてきた。アランもまた音を立てないように注意しながら床に降り立つ。

アランの手をビアンカが握る。

「あ、行きましょう。お化け退治に北のお城 レヌール城へ。

猫ちゃんを助けなきや」

「うん」「

連れだつて部屋を出る寸前、アランは父の寝台を振り返った。バスは目を覚ます気配がない。じめんなさい、と心の中で謝る。すると不意に、父の口からか細い寝言が漏れてきた。

「……マーサ……私たちの……アランは……元気だ……」「さゆり、とアランはビアンカの手を強く握った。

部屋を出て、慎重に扉を閉める。他の宿泊客やビアンカの両親を起これないよう、息を潜めて歩く。重い正面扉を開けると、肌を刺すような冷気が吹き付けてくる。

「ひつ……ひつ……やはり夜は少し寒いね」

「……うん」「

「……」

無言。やがてビアンカが意を決したように口を開く。

「ねえアラン。さつきのおじさまの寝言……だよね？ マーサって「僕のお母さん……だと思つ」「思つ?」「

「お母さんは僕は小さいときにいたくなつちやつたんだ。僕はぜんぜんおぼえてなくて、でもお父さんはお母さんをさがして旅をしているつて。ずっと」

「……ごめん……アラン。私、いけないと聞こひやつた……」「ううん」「

アランは首を振る。

アランは空気が流れた。

アランは夜空を見上げた。冷たく、けれど澄み切った空氣の向こ

うには、藍色の空を埋め尽くすほどの星が瞬いていた。

確かに、アランにははつきりとした記憶はない。けれど身体が、心が、薄ぼんやりと母の姿を思い起こさせるのだ。温かい、優しい、そして清らかな母の気配 いのち。

この世界のどこかで母は同じ空を眺めているのだろうか。いつか、パパスとともに再会することができるだろうか。いや きっとできる。

パパスが探し求め、そして母が自分の思うとおりの人ならば、いつか必ず

「ありがとう、ビアンカ。でも僕はだいじょうぶだよ。……それより、僕が昼間言つたことおぼえてる?」

「え?」

「お化け退治するならきちんと装備をととのえてから行こうって話」氣分を入れ替え、アランは懐から財布を取り出した。そこにはサンタローズの洞窟で得たお金が詰まっていた。ビアンカが「わあ」と声を出す。

「これで買い物しようよ。お店が開いているか、わからないけど…」

「街の人は働き者だから、まだ大丈夫だと思つよ」

それから一人は武器屋、防具屋、道具屋を見て回った。アランの手持ちは少なかつたからろくな買い物はできなかつたし、何よりもこんな時間に子ども一人で出歩く姿にお店の人は驚いていたが、ビアンカが持ち前の大胆さで無理矢理納得させてしまった。

「何だか本当の旅に出るみたいだね」

ビアンカが言う。浮かれているのか、声が弾んでいる。アランはうなずき、それから自らの腰に手をやつた。

そこには真新しい『銅の剣』が鞘に収められていた。スライムにもらった『かしの杖』を手放すのは気が引けたが、これから向かう先のことを考えて思い切って購入した。

ついに自分も父と同じ『剣』を持つ そう考へると首の後ろが

ふつふつと沸き立つような錯覚を抱く。

ちなみに隣のビアンカは『くだものナイフ』を持っている。「本当は『いばらのムチ』が欲しかった」と彼女はぼやくが、お金が無い以上高望みはできない。

夜のアルカバの目抜き通りに人の姿はほとんどなかつた。時折、酒場の方へ向かう男たちとすれ違うくらいだ。その先、街の出入口にさしかかると、そこには昼間と同じ門番の男がいた。

ただし 木の幹にもたれて居眠りをしている。

「この寒いなか、よく居眠りができるね。まじめなのか、ふまじめなのか、よくわからないわ」

ビアンカが呆れた声を出す。一人はそっと、門番の男の脇を通つた。

街を出る。森と、草原と、遙か先には高い山々と、それらすべてを覆い尽くす広大な夜空が広がつていた。

ビアンカが拳を握る。

「待つってね、猫ちゃん。私たちが必ず助けてあげるから……ござ、レヌール城へ！」

夜空の下、意氣盛んに出発したアランとビアンカ。しかし、道中はそう簡単にはいかなかつた。

暗い夜道を子ども一人で旅をすること自体がまず難事だ。満天の星である程度の明かりは確保できるとは言え、一歩森の中に入るとそこは一寸先も見通せぬ闇が広がる。自然、見晴らしの良い、拓けた草原を歩くことになるが、何もないただつ広い空間を一人だけで進むのは、それはそれで勇気が必要だつた。

そして何より危険なのが、道すがら遭遇するモンスターたちだ。草原で一度に会うモンスターの数は少ない。だが夜ということもあつてか、彼らは普段より好戦的だつた。

勝ち気だが、モンスターとの戦闘自体にはまったく不慣れなビアンカをかばいつつ、アランは銅の剣を何度もふるつた。初めは扱いに苦労した剣も、何度も戦闘を重ねる内次第に手に馴染んできた。初めて銅の剣を握ったときの高揚感とはまた違つた感覚が、アランの中では芽生えつつあつた。

そして、何度目かの戦闘のときである。

「アラン！ どいてっ！」

突然、ビアンカが声を上げた。ちょうどモンスターの一體を斬り伏せたアランは振り返る。

ビアンカの指先に、松明の炎のような赤い光が集まつていた。

「 、いくよっ。メラ！」

攻撃呪文。

小さな火の玉がビアンカの指先から光の尾を引いて飛翔する。慌てて飛び退けたアランの脇を通り、今まさに飛びかかるうとしていた『おおねずみ』に直撃した。

炸裂音が夜の空気を切り裂く。

そのまま吹き飛んだ『おおねずみ』は、黒煙を上げて消えていった。

瞠目しながらアランがビアンカを見ると、彼女は照れたように頬をかいていた。

「えへへ。はじめての呪文、上手くできたかな？」

「うん……うん！ すごいよ、ビアンカ！」

アランは素直に驚き、そして喜んだ。アランは使えるのは回復系の呪文だけで、いまだ攻撃呪文のひとつも使えない。だがビアンカは、アランより戦闘の経験が少ないのに、もう立派な攻撃呪文を使えるようになつていてる。羨ましいと/orも、「すごい！」という気持ちの方が勝つた。

アランの言葉を受けて、ビアンカははにかんだ。

「ありがとう。でもアランにすこしよ。怪我しても、すぐにホイミで治してくれるもん」

そう言って、満面の笑みを浮かべるビアンカ。

そう。

このとき一人は、完全に油断してしまつていた。

風船から空気が抜けるような音が、耳に届く。ビアンカが何事かと振り返る。

アランは慌てて叫んだ。

「ビアンカ、危ない！」

直後、ビアンカに向かつて緑色の『何か』が体当たりした。じゅあっ、という音が響く。

「きやあああっ！」

「ビアンカ！」

アランは剣を構えて走った。

ビアンカに攻撃をしかけた『何か』 緑色の崩れた身体を持ったモンスター、『バブルスライム』だ。

『バブルスライム』はビアンカからすると離れると、今度は

アランに向かつて体当たりをしてくる。アランは走る勢いのまま、その不定形の身体に銅の剣を叩き付けた。

体当たりをそのまま迎撃された『バブルスライム』は水風船のように弾け、霧となつて消えていった。

ビアンカが膝から崩れ落ちる。

アランは無我夢中でビアンカを抱き留めた。

「ビアンカ、ビアンカ！ しつかりして！」

「……」

返事がない。気絶しているようだつた。

しかも顔色がひどく悪い。頬の辺りが真っ青になつてゐる。首筋には汗が浮かび、身体を支えるアランの手を湿らせた。

「……まさか、毒！？」

パパスから聞いたことがある。『バブルスライム』など一部のモンスターは、その攻撃で相手に毒を与えることができると。のんびりはしていられない。アランは息を整え、ビアンカの額に手を当てた。ゆっくりと呪文を唱える。

「 、キアリー」

光の粒子が舞い、ビアンカに吸い込まれていく。

すう……、とビアンカの息づかいが穏やかになつた。顔色も元の瑞々しい肌色に戻つていく。だが、彼女が目を覚ます様子はない。重ねてホイミをかけようとして、アランは自らの精神力が切れかかっていることに気付いた。

このまま先に進むのはダメだ アランはビアンカを背に、いつたんアルカパへと戻ることにした。

アルカパの街が見えてきた。アランはほつと息を吐こうとしたが、ここまでビアンカを背負つてきたせいか荒い呼吸しか漏れなかつた。

「う……ううん……」

「ビアンカ！？ 気がついた？」

「アラン……？ あれ、私」

アランの背中でビアンカが目をしばたかせる。アランは手短に経緯を説明した。話を聞いた彼女は少しだけ顔を青ざめさせ、やがて神妙な声で「……自分で歩く。ありがと」と言った。

しばらく無言のまま、一人並んで歩く。アルカパの街に入り、相変わらず大胆な寝相の門番の脇を通り、宿の扉の前に辿り着くまでビアンカは口を閉ざしていた。

アランはビアンカを気遣つた。

「だいじょうぶ？ ビアンカ」

「……うん。ごめんねアラン。迷惑かけちゃった」

「いいよ」

「ごめん。痛いとか、お城に行くのが嫌になつたとか、そういうのじゃないんだ。だけど、ちょっと……ダメだったなあ私、ってさ」珍しく落ち込んだ様子の彼女にアランも困り顔をする。こういつときどきのように声をかければいいのかわからなかつた。

しかし、やはりビアンカはビアンカだつた。

扉に向かい合い、大きく深呼吸。家主を起こさないようじゆつくりと扉を開ける。ちょうど席を空けていたのか、受付カウンターに人の姿はなかつた。それを確認し、アランを振り返つたときにはもう、彼女の顔には笑顔が浮かんでいた。

「今日はここまでにしましょ！ いろいろあつて疲れちゃつた」

「うん」

「ねえアラン、明日少し付き合つてもいいえる？」

「どうしたの？」

「いや、レヌール城に行くために、もつといろいろ準備しておきた
いなと思って。今日の冒険でお金もたまつたことだし」

「むん、と気合を入れるように拳を握りしめるビアンカ。

「やっぱり冒険は楽しいことばかりじゃないよね。あぶないこと
もあるんだ。だから私、がんばるよ。かなづかさんをたすける。
そのためにはもつとがんばらなきゃいけないんだ！」

「ビアンカ……」

「協力してくれる、アラン？」

少しだけ不安そうにこちらを見てくるビアンカに、アランは笑顔
で「もちろん」とうなずいた。

翌日。

アランとビアンカは連れだつて街へ出かけ、昨夜獲得した資金を
使って装備や道具類を整え始めた。一晩経つてすっかり元気を取り
戻したビアンカは、念願の『いばらのムチ』を手に入れてご機嫌だ
った。

宿で早めに休み、夜には街を抜け出す。一人は街の周辺で念入り
に戦い方を確認した。素人で、しかも子どものやることではあつた
が、アランには洞窟での冒険で一日の長がある。ふたりで協力して
戦うためにも、戦闘の訓練は必要だつた。

そうしてある程度の経験を積んで、早めに切り上げる。さらに夜
が明けてから、手が届かなかつた分の装備を購入する。同時にレヌ
ール城についての噂をふたりで手分けして集めた。それによると、
どうやら城にお化けが棲みついたのは最近のことらしく、夜な夜な
すすり泣くような声が聞こえてくるとのことだつた。

こうして、瞬く間に時間は過ぎていいく。

本来短期滞在のはずのアランたちが、いつまで長くアルカパに滞在できたのは理由があった。

「ふえっくしょっし！ つう……ブルブル」

アランが宿の部屋に戻ると、パパスが寝台に横になつたまま盛大にくしゃみをしていた。ビアンカの父、ダンカンの風邪をうつされてしまい、寝込んでしまったのだ。

「お父さん。だいじょうぶ？」

「うう……情けない。アラン、うつすといけないからあまり近づいてはいけない」

「今お薬取つてくるね」

そう言つて階下へ降りる。ダンカン夫妻に薬の件を伝えると、残つた薬を快く分けてくれた。ダンカンの調子はかなり良くなつていで、寝台から起き上がるほどに快復していた。

薬を抱え、部屋を出る。そのときビアンカとすれ違つた。

真剣な表情で、うなずきをかわす。

『じゃあ、また夜に。迎えに行くから』

『いよいよだね』

そう

今夜、ついに一人はレヌール城へ乗り込むことに決めたのだ。

「」の田の風は、いつもより少し冷たく感じた。

「……行つてきます」

振り返り、アランはつぶやく。視線の先には月と星々の光に照らされ、アルカバの街が静かに眠っている。

「アラン、もっと元気に行きましょう。私たち、猫ちゃんをたすけに行くんだから。だいじょぶ、私たちにはできるよ」

「うん。そうだね。行こう、ビアンカ」

背筋を伸ばし、アランとビアンカは肩を並べて歩き始めた。草原を横切り。

森を抜け。

高い山々を横手に見ながらひたすら歩く。
そしてついに、高台に立つ古城が見えてきた。

最初に異変に気付いたのはビアンカだった。

「ねえ……あのお城の空だけ、ものすごく暗くない……？」

アランは顔を上げた。木々の間からのぞくレヌール城、その上空には夜空よりもさらに暗い雲が厚く覆っていた。時折白い稻光^{いなびかり}が雲の表面を走っている。

レヌール城の正門を前にしたときには、明かりだけでなく気温すらもさらに低下したような錯覚をアランたちは抱いた。勇気を振り絞り、ふたりは入り口の大扉の前に立つ。

さび付いてがさがさする鉄扉を、二人で力を合わせて押し開ける。
が。

「……あかない」

「びくともしないわ。どうしましよう」

手についたさびを嫌そうに拭いながら、ビアンカが途方に暮れた
ように呟つ。アランは辺りを見回した。

「これだけ大きなお城だもの。きつとほかに入り口があるはずだよ」

「そうね。手分けして」

言いかけ、ビアンカはふと後ろを振り返る。何もないことを確認して「ふう……」と息を吐き、恥ずかしそうに笑う。

「手分けしないで、いつしょに探しましょ？」

「うん」

正面玄関から離れた二人は、とりあえず外壁に沿って歩き始めた。城を取り囲む高い塀との間を慎重に進みながら、アランたちは城の裏手に回った。

「あ！ あれ見て。階段じゃないかしら」

ビアンカが指差す先に螺旋状の階段があつた。どこに続いているのかと一人して階段の先を目でたどる。どんどん首が上を向き、やがてほとんど雲を見上げるほどになつたとき、ようやく階段が終わっていることに気付く。

どうやら城の最上部まで続いているようだ。

ひとりわ強く風が吹く。木々が鳴った。ビアンカがぎゅっと袖を握ってきた。

「……高いね」

「あの子をたすけるためにはのばらないとだね、ビアンカ。でも」「でも？」

「……何だかこのお城、ヘンだよ」

瞬間、稻光が走った。空気を引き裂く音が耳を通り越してお腹の辺りまで響く。

ビアンカが震える声を出した。

「アランへ、何てこと言つのよ。も'づバカッ」

「い、ごめん。だけど、いかなきや。ほら、ビアンカ

ビアンカの手を引き、アランは階段を上り始めた。一本の太く大きな柱に石板を突き刺したような螺旋階段で、眼下の光景を足元から見ることができた。上がれば上がるほど風は強まり、一段上ろうと上げた足が風に取られそうになる。何かにしがみつこうにも、手

すりは今にも朽ち果てそうでとてもよりかかるなどできない。
空は絶え間なく鳴動している。「おおん、『じ』おん、と雲の中で
雷が鳴っていた。

時間をかけて、ようやく一人は最上部に辿り着く。
まるでアランたちを招くように、ぽつかりと入り口が開いていた。
その先は真っ暗だ。

一人は意を決し、武器を構えた。慎重に入り口から中に入る。
ふつ……と周囲が暗くなる。

足裏が固い石畳から、柔らかい何か 絨毯を踏んだ。

直後、背後で金属の擦れる大きな音が響いた。入り口の鉄格子が
ひとりでに降りたのだ。

ただでさえ暗い視界がさらに漆黒に染まつた。

「……！」

アランは産毛が逆立つ気配を感じた。前から、後ろから、横から
周囲すべてから、得体の知れない気配が迫ってくる。
繋いでいたビアンカの手が、すうつ、と遠のいた。

「きやあああああああつ！」

「ビアンカッ！？」

耳をつんざく悲鳴。まぎれもなくビアンカの声は、しかしごとに
立ち消えた。

部屋が急に明るくなる。壁にしつらえられた松明がひとつでに火
を放つたのだ。

アランは立ち尽くす。

棺がすらりと並んでいた。そのすべてのふたが開いている。

ビアンカの姿はどこにもなかつた。

「ビアンカ、ビアンカ！？」

呼ぶ。だが返事はない。

部屋の隅に溜まつた闇に声が吸い込まれていくようだ。アランは勇気を振り絞り、開いたままになつていてる棺をひとつひとつ見て回つた。

松明の光に照らされ、空中に舞う埃が見える。棺の中は例外なく空っぽで、蜘蛛の巣がはつていて、何より血のように真っ赤だった。部屋の奥 ひとつだけ、下に降りる階段がある。

松明の光が微妙に届かないそこは、まるで奈落の底に続いているかのようである。声はしない。代わりに、かすかに、ほんのかすかに風の通る音がする。

『銅の剣』を握りしめ、アランは階段の一級目に足を置いた。こつ……という音がはつきりと耳に届く。手すりを握りながら、ゆっくりと降りた。

心なしか、呼吸をするのが、苦しい。

下の階も松明が燃えている。人影など皆無 やはりここも、ひとりでに明かりが灯つたのだ。幽霊が居着いているという噂は、どうやら本当なのだろう。

左右を見回しながら、アランはビアンカの姿を探した。本当に幽霊がいるのなら、そして、彼女がそいつらに連れ去られてしまつたのなら 悪い想像を振り払い、アランはひたすら歩いた。

「……？」

ふと、振り返る。

埃が溜まつた床の上に点々と自分の足あとが付いているだけで、背後には誰もいない。大きな石像が通路を挟むように立つていてるだ

けだ。明かりはあるのに、闇は濃い。

アランは再び歩き出した。

「…………」

「…………？」

再び振り返る。今度は身体ごと、剣を構えながら、だ。
石像が『こちらを向いていた』。

アランは思わず睡を飲み込み、一步、二歩と後退る。

石像は動かない。穴の開いた目で、じつとこちらを見ているだけだ。だけど、あの目はさつきまでは確かに別の方向を向いていた。

横目に扉の姿を捉える。

ゆっくりと、ゆっくりとそちらへ向かった。視線はまだ、石像と合わせたままだ。

石像は 動かない。

いま気付く。石像が握っている剣。あれは石ではない。本物の鉄だ。松明の光が、そこだけ妙に眩く反射している。

石像は動かない。だが 視線はずっと、アランを向いていた。手が、扉の取っ手に触れる。握った。回す。がちやん……と音がして、開く。

冷たい風が流れ込んできた。室内とはまた違った闇が扉の隙間からのぞく。

アランは一気に扉を開けその奥に身体を滑り込ませると、そのまま叩き付けるように扉を閉めた。耳鳴りがした。あまりにも静かな緊張感に、額に汗をかいていた。

雷鳴がどどろく。

背筋が凍るほど驚きながら、アランはふと、どこからか漏れてくる小さな声を聞いた。

『…………うーん…………うーん』

「…………ビアンカ？」

聞き間違えではない。ビアンカの声だ。うなされているような、苦しげな声だ。

周囲を見回す。そこでまた、冷や汗をかいた。

そこは城の屋上に設けられた 墓場だつた。

雷鳴に邪魔をされながら、アランは声のもとをたどる。するとひとときわ大きな一つの墓から声が漏れていたことを突き止めた。

墓石に耳を当て、ビアンカの声を確認すると、アランは意を決して蓋をはずした。重い石板が、腹に響く低音を上げながらずれていく。

半分ほど開いたところだ

「……ビアンカ！」

「ふはあっ！ ああ、アラン！」

ビアンカが勢いよく飛び出してきた。

「よかつた、ふじだつたんだね」

「すー、はー、すー、はあ……。うん、ありがと。たすけてくれて。とても息苦しくて、しぬかと思つちやつたわ。もつかよつと早く来てくれるとうれしかつたのに」

ビアンカの言葉に目を瞠る。意外なほどあつけらかんとしているなと思ったアランだったが、よく見るとビアンカの肩が細かく震えていた。そのときの恐怖を表すように、ビアンカの表情が徐々に沈んでいく。

「あのとき、とつぜん真っ暗になつたと思つたらふつと身体が軽くなつて。誰かに抱えられているんだつて思つたけど、全然姿が見えなくて……気がついたらあの中にはいたの。ねえ、アラン。やつぱり」「お化けがいる……んだよね？」

「……うん」

「……」

しばらぐふたり、無言になつた。

風が、冷たい。

自らの身体を抱くビアンカに、アランは手を差し伸べた。

「いこう、ふたりで。こんどは必ず、僕がビアンカを守るから」

「アラン……」

つぶやくアンカに、アランは元気づけるように笑いかけて見せた。

21・レヌール城主の間

ビアンカを手をしっかりと握り、再び扉をくぐって城の中へ入る。

「……どうしたの？ アラン」

「……ううん。何でもない」

両脇に鎮座する石像に目をやりながらアランは短く答えた。

石像の顔の向きが戻っていた。

いくぶん早足に廊下を歩く。突き当たりにさりげなく階段があった。煙でも充満しているのかと思えるほど、その先は真っ暗であった。煙で下りる。

床に足を置いたときには、すでに隣にいるビアンカの姿すら見えなくなっていた。

「……真っ暗だわ。アラン、気をつけてね」

「うん」

さらに強くお互いの手を握りしめ、アランたちは一步一歩前に進んでいく。だが周囲を完全な闇に包まれていると、次第に自分がどちらの方向に歩いているのかすらわからなくなってきた。

闇はあるで粘土のようにアランたちに絡みつく。

ぎし……

きい……

意識しなくとも、周囲の微かな音が耳に入ってくる。

何とか壁伝いに向かいの扉まで辿り着いたときには、ふたりともすっかり疲弊していた。

だがレヌール城の怪異はそれだけでは終わらない。

「あら」

扉を開け、光のある部屋に入ったとき、ビアンカが目をこすった。

「いま、あそこに誰かがいたような」

指差す先にはさらに階段があった。どうやらこの城は各階を繋ぐ階段が至る所に設置されているらしい。だがアランが田を凝らしても、そこに人影は見えなかつた。

意を決し、階段へ向かう。そこは他と違い、造りが豪華なものだつた。螺旋状に上へと続いている。埃の舞う絨毯を踏みしめながら、アランたちは階段を上りきつた。

長く、広い廊下が目の前に続く。

「……まるで王様のお部屋みたい。このお城の持ち主さんがいたのかな……？」

ビアンカのつぶやきを耳に、廊下を歩く。その途中、大きな扉のある部屋の前に来た。

物音が、する。

しかも床がきしむような類の音ではない　人の声だ。

泣いている。

息を呑むビアンカの前で、アランは扉に手をかけた。

「ちょ、ちょっとアラン！」

制止を振り切り、部屋の中へと入る。

橙色の灯火がアランたちを包む。とても大きな室内だつた。埃を被つてはいるが、調度品はどれもこれも立派な揃えで、一目見ただけでもここが身分の高い人の居室だつたことがわかる。

恐怖も忘れ感嘆の声を上げるビアンカを背に、アランは何気なく部屋の奥を見た。

「……っ！」

悲鳴を飲み込む。

ソファーの上に、女性がひとり静かに腰をかけていた。まっすぐアランたちを見つめている。その顔には涙の跡があつた。まるで息を吹けば散り散りに消えてしまいそうなほど儂げで

実際に、身体が透けていた。

ビアンカも気付き、アランの服の裾を握る。その手を握り、アランは女性のところへと歩み寄つた。女性はこちらを見つめ続けてい

る。アランは恐怖よりも強く、「何とかしなきゃ」と思った。彼女の目があまりにも哀しそうで、つらそうだったから。

声をかけようとしたその瞬間

ふい……と女性が顔を逸らした。

代わりに指で、どこかを指し示す。

そしてそのまま音もなく消えていった。

「あ……」

「お化けさん……だよね？　でも何だか、とってもかなしそうだったよ」

「うん。僕もそう思った。何でなんだろう。お化けって、もっと怖いものだと思っていたのに、あの人は、なにかちがう感じだった」「それにさつき、どこかを指差していたよね」

アランとビアンカは顔を見合せた。

そして二人同時に、同じ方向を見る。

壁の向こう　廊下の奥。女性の指は、この部屋のそばに先を示していた。

部屋を出た一人は、さらに廊下の奥を田指した。あの女性の幽靈が指示した先に、何かがあると思ったのだ。

「けほ、けほ」

ビアンカが咳き込む。「何だか空気が重いね」と彼女は言った。それはアランも感じていたことだった。足元と天井の両方から、淀んだ気配が漂つてくる。

突き当たりに扉があつた。ゆっくりと開ける。

「……？」

最初、それが何なのかアランにはわからなかつた。目の前に広がる赤くて白くてふわふわしたもの。田を凝らしても形が曖昧で、煙のようにぼやけた何か。

やがてそれが豪奢な服であると気付き、それを身に付けているのが恰幅の良い男だと気付き、さらには男が目の前に『浮遊』していることに気付いて悲鳴を上げた。

「うわあっ！？」

「きやあっ！？」

ビアンカも同時に声を上げる。すると男は滑るように部屋の奥へと飛んでいった。

奥の扉を『すり抜ける』。

呆然と立ち尽くすアランたちは、やがて各自の武器を取つた。唾を飲み込み、一步踏み出す。あれがこの城の幽霊の親玉か二人は無言でうなずきあつた。

さつきよりもずっと慎重に扉の前に立つ。そつと押し出すように扉を開いた。途端、強い風がアランとビアンカの脇を走る。

そこはベランダになつていた。城の外壁に沿つてひしむるやかなスロープを描いて上へと続いている。

突き当たりに、さきほどの男が浮かんで待っていた。

恐る恐る、二人は男の前に立つ。武器を構え、その切つ先を向けると、男はどういうわけか感心したような声を出した。

『おお。勇気のある子どもたちじゃ。まさかこここまで付いてくるとは』

「え?」

予想外の言葉にアランの手が止まる。すると男は満足そうに何度もうなずいた。

『わしはこのレヌール城の主、ヒリック。……といつても、『ご覧の通りの有様。もう死んでからずいぶんと経つ』

「あるじ?』

『じゃあレヌール城のお化けの正体は、おじさま?』

『いや』

ビアンカの問いかけに、レヌール城主は小さく、しかしほつきりと否定した。

『少し前からこの城に親分ゴーストとやらが棲みつきはじめてな。わしや^{おやぢ}后、それにこの城に眠る多くの使用人たちは奴らに縛られ、安らかに眠ることができなくなつた。今もなお、下の階では「ゴーストたちが好き勝手にしている。みな、ほとほと困つておつたのだ』

「じゃあ、噂で聞いた『人が泣く声』って』

『我が后を含め、囚われた靈たちには女性も多い。彼女らの悲痛の叫びが君たちの住む場所まで届いたのだろう。それは申し訳ないと思つてゐる。だが、わしらとしてはどうしようもないのだ』

沈鬱なエリックの表情にアランとビアンカは口を開かず。

すると突然、エリックが目前に近づいてきた。

『そこでだ君たち。噂があるにもかかわらずこの城までやつてきて、なおかつこんなに奥までたどり着けた君たちの勇氣と力を見込んで、ひとつ頼まれてくれないか!』

「わわつ!?』

『親分ゴースト!』にいつさえ倒すことができれば、他の子分たち

も諦めて出て行くだらう。そうすればわしらは安心して眠りに入ることができる!』

『え、えつと?』

『だいじょうぶだ! 君たちはまだ小さいが、その勇気は本物であるとわしは信じる。きっと親分ゴーストを退けることも可能だらう! 頼まれてくれないか! な!』

「あ、あの。エリックさん、ちょっと近づき……」

『な!』

うう……と困惑の声をあげるアランとビアンカ。しかしエリックは一向に引く気配がない。このままではエリックに身体を乗っ取られるか、そもそも呪われてしまいそうな勢いだった。

やがて腹を決めたのか、ビアンカが拳を握った。

「おちついて、エリックおじさま。わたしたち、この城のお化けを退治しにきたの。おじさまの血つよいに悪いお化けがいるのなら、わたしたちがやつづけるから」

「うん」

アランもうなずく。するとエリックは大げさなほどに喜んだ。

『そうか、そうかそうか! いやありがとう! 親分ゴーストはこの城の最上階にいる。ただその部屋に行くためには一度一階まで下りなければならないのだ。まあ、こちらへ来たまえ』

ふわふわ、とアランたちの頭上を越えてエリックが扉の前に降り立つ。

『この城の厨房にたいまつがある。ただのたいまつではないぞ。わしらの生きていた頃、儀式用に使っていた聖なるたいまつだ。それを使えば、途中の階にある不自然な闇も祓うことができるだらう』厨房は地下にある、とエリックは付け加えた。ところが一向に動こうとしない彼に、アランは念のため尋ねる。

「あの、せめてたいまつのありかまで一緒に来てもらうことば……?』

『わしでは闇を越えられない。なにせ縛られてしまっていいるから』

自信満々に言われてしまつた。

肩をすくめたアランとビアンカは、気を取り直して来た道を引き返し始める。

目指すは地下の厨房、たいまつが保管されている場所だ。

自然と小走りになりながら廊下を進む。どのような形であれ、目指すべき場所がわかつた分、二人の足取りは軽くなつていて、だが、それもすぐに止まる。

「……うわあ」

思わず漏れた声。複雑な装飾の扉を抜けた直後であつた。そこは巨大な吹き抜けの空間となつていた。一、三階分がひとつ、フロアで繋がっている。アランたちがいるのは、そのうちの一階部分の渡り廊下だつた。

感嘆の声、ではない。むしろ怖れ、悲痛さを滲ませた苦悶の声だつた。

フロアにいたのは何十人もの人々　すべてが、半透明な身体をした幽霊だつた。

おそらくエリックが言つていたこの城の使用人たちだろう。身なりこそ綺麗な服で着飾つている。だがその表情は皆、苦しげでつらそうだつた。空中では何組もの男女が踊つている。

『誰か……止めてくれ……』

『身体が、身体が勝手に。もうイヤ……』

アランたちのすぐそばを通りでいた一組の男女。彼らは空中で見事なステップを踏みながら、今にも泣き出しそうな顔で呻いていた。誰も彼もが、彼らと似たような境遇にあつた。

フロアの中央には大きな四角い穴が開いていて、その周囲にモンスターがたむろしていた。

『ひやひやひやつ。そら、踊れ踊れっ』

『おおーい、メシはまだか。いい加減腹が減つてきたぜ！』

『この城は最高だ！　親分ばんざい！』

こちらは実に愉快そうに、聞いているだけで背筋が泡立ちそうな

金切り声を上げていた。

「アラン」

ビアンカがわざやく。

「これつてもしかして、親分ゴーストたちのしわざなのかな」「うん……あつとそだよ。あのひとたち、おりやりこんなことさせられているんだ。ゆっくり眠ることもできずには……」

「ひじい」

口元を押さえ、ビアンカがぽつりと漏らす。アランはその手を握った。急ごう、と率先して走り出す。渡り廊下を駆け抜け、扉をくぐり、階段を下りる。喧噪は遠ざかり、かわりに粘つくような薄暗闇と湿氣、そして鼻をつく強烈な臭いがアランたちを襲つた。

涙目になりながら我慢して通路を進む。モンスターの気配があった。かちやかちや……と、食器を運ぶ音がする。アランとビアンカはうなずきあつた。

さつとここが厨房だ。

ふたりは棚の陰に隠れるように慎重に進んでいった。調理台と思しき大きな机に身を隠したとき、どん、と大きな音がした。一人の息が詰まる。

すぐそばでモンスターが談笑していた。

「お、それが今日のメインディッシュか？」

「いや。親分がどびつきのごくそうを用意してくれるんだとい。これはそれまでの繋ぎ」

「そりや楽しみだぜ。へつへつく」

どきん、どきんと心臓を高鳴らせながら、同時に漂つてくる猛烈な臭気に呻き声を必死に抑える。これは巨大な肉が完全に腐つた臭いだ、ぜつたい。モンスターはこんなものを食べるのかとアランは辟易した。

やがて腐つた肉を置いたままモンスターはテーブルを離れていく。様子を窺うと、一つの炎がゆらゆらと揺らめいているのが見えた。巨大なるつそく型のモンスター『おばけキャンドル』だ。

彼らの目がよそへ行つてゐるうちに、アランとビアンカは物陰を飛び出した。身を屈め、厨房の奥を手指す。そこは壁一面が物置棚になつていて、アランたちは極力物音を立てないようにといまつを探し始めた。ときどき後ろを振り返り、モンスターたちがこちらに気付いていないことを確認する。

壺をのぞいていたビアンカに袖を引かれた。

「アラン、これ」

中から取りだしたのは表面に複雑な文様が刻まれた木の棒だつた。先端に青く染められた布が巻き付けられ、さらにそれを保護するよう銀細工の装飾が施されていた。

「まちがいない。きっとそれだよ」

「ええ。……でも聖なるたいまつをこんなところに置いておくなんて、エリックさんってやつぱり変わつてしているのね。まちがえて薪に使われたらどうするつもりなのかしら」

呆れた声を出すビアンカ。アランは苦笑し、それからすくに表情を引き締めた。

来たとき以上に慎重に、アランたちは厨房を横切る。幸い、会話に夢中のモンスターたちに気附かれることなく部屋を後にすることができた。

「じゃあいくよ、アラン」

「うん」

アランがうなずくと、ビアンカは短く呪文を唱えた。指先に小さな火の玉が出現し、たいまつの先端に移る。すぐに燃え広がり、たいまつは煌々と光を放ち始めた。見るだけで心が落ち着くような、深い青の輝きだ。

厨房を抜けたアランたちは、再びあの漆黒の階へと足を踏み入れていた。エリックのアドバイスどおり、たいまつを暗闇に掲げる。まるで布に水が染み渡るように、内部の様子がはっきりと見えるようになった。濃く濁っていた闇がどこか苦しそうに隅へ隅へと追いやられていく。

「すごい。エリックさんの言つてたことはほんとうだつたんだ」「ほんとうね。でも……だつたら最初からこれを使っていてほしかつたわ」

ベルンダでのやり取りが尾を引いているのか、ビアンカはどことなく不満そうに頬を膨らませる。一人は寄り添つようにゆっくりと歩き始めた。

遠くモンスターたちの嬌声が聞こえる。

これから彼らを討伐するのだと考へると、自然と身体が固くなつた。

だが引き返そとは思わない。大広間でモンスターに縛られた人々を見たこと、そしてアルカパで待つあの猫のことがアランたちに「ぜつたいに退くものか」という勇気を与えていた。

最初にこの階に入つたときにはわからなかつた階段を見つける。勢い込んで登り始めたアランたちの足は、しかし次第に重くなつた。

……何か、違う。空気が他よりも重い。

「ビアンカ、気をつけて」

「うん」

間違いない。この先に強い敵がいる。

階段を上りきると、絨毯敷きの広い廊下に出た。たいまつが壁面に施された精緻な文様を浮かび上がらせる。調度品も他の階より一段階、豪華に見えた。

行く先に大きな大きな扉が見えた。右手と左手、向かい合つようにひとつずつ。

左手の大扉は開いている。そこから、たいまつに照らされてもなお淀む闇がゆらゆらと漂いでいた。

アランとビアンカは武器を構えた。まっすぐにその扉へと向かう。大扉の先は謁見の広間だつた。扉の入り口から中央奥の椅子まで赤毛氈あかもうせんが続いている。

アランがたいまつをゆっくりとかかげると 椅子に腰掛けた『そいつ』が見えた。

「ほほう。これはこれは。珍しい客だな」

粘つく声。麻布を擦る音を立てながら『そいつ』が椅子から立ち上がる。全身を包むローブはところどころ穴が開いていて、そこから白い骨が見えた。『そいつ』は笑う。からからから……と骨同士が擦れ合う乾いた音が響いた。

「おまえが」『……』『親分ゴースト』！

アランとビアンカが唱和する。「そつとも」と『親分ゴースト』は首肯した。余裕たっぷりにこちらへと一歩、三歩歩いてくる。アランの頬に汗が伝った。初めて味わう緊張感だつた。

「こんなガキどもが俺たちの根城に乗り込んでくるとはなあ。結構、結構。なかなか旨そうじやないか。けけけ」「なんですつて」

ビアンカが気色ばむ。すると『親分ゴースト』がやりと笑つた。

「ちょうど俺も子分たちも退屈していたところだ。せいぜい」「もつたつけたような間。直後、アランは異変に気付き、声を上

げようとした。だが。

「 愉しませてもらおうかつ！」

『親分ゴースト』が言い放った刹那。

アランとビアンカの足元が突如として『消えた』。

「……えつ」

「き、きやあああああっ！」

床に開いた大きな穴にアランとビアンカは為す術もなく吸い込まれる。後にはただ、『親分ゴースト』の嘲笑だけが響いていた。

25・背中合わせの攻撃呪文

落ちる。
落ちる。

落ちる！

長い悲鳴の尾を引きながら、アランとビアンカはひたすら落ち続ける。

視界の端を、もの凄い勢いで白い何かが過ぎ去つていった。松明いや、違う。あのホールで目にした、この城の使用人たちだ。彼らの目の前を、アランたちは落下していったのだ。

やがて床に開けられた大きな穴へと入り込み、さらに下へ。

衝撃は突然だった。べっしゃあっ、という湿っぽい音とともに落下が止まる。ひどく柔らかく、それでいて水っぽい何かに埋もれる。途端、強烈な臭いがアランたちを襲つた。

「けけけっ。来たぜ來たぜ、今日のメインディッシュが！」

くらくらする頭でその台詞を聞く。顔を上げると、あの『おばけキャンドル』たちが頭の炎を愉快げに揺らしながら咲笑を上げていた。

「じゃあ、ここは台所……？　でもメインディッシュって……。

「上の連中がお待ちだ。それ、上げろ上げろ！」

「きやあっ！？」

今度は台座」と急激に持ち上げられた。隣でビアンカが声を上げる。

アランたちが落下したのは料理が盛られた大皿の上だった。元の材料さえ判別のつかない不定形の何かにアランたちは半身が埋まっている状態である。臭いも感触も最悪だったが、おかげで意識を失うこともなく大きな怪我もない。だが安堵している暇は彼らにはなかった。

薄暗い厨房から煌々と明かりの灯るホールへ。アランたちは再び可哀想な幽霊たちが踊る場所へと引き上げられた。そして。

「ひやつほうつ！ メシだメシだ！」

「おいおい、待ちくたびれたぜ！ 早く食わせりお」

「面そうなガキどもだ。こりやあたまらんぜー！」

アランたちを待っていたのは、何体もの『おばけキャンドル』の群れ。完全に囮まれていた。口ウでできた白いナイフを振りかざし、モンスターがじりじりと距離を詰めてくる。臭いで顔を青くしていたビアンカが、短く息を呑んだ。

アランは彼女の手を一度、強く握りしめた。

「だいじょうぶ」

「あ……」

「ぼくらはやらなきやいけないことがあるんだ。だから、戦うんだ。ビアンカ」
力強いアランの言葉にビアンカは我に返る。「ええ」と彼女はうなずいた。

ふたりは大皿の上にすくと立った。「おおつ！？」とおばけキャンドルたちがざわめく。アランは銅の剣を、ビアンカはいばらのムチを手に取った。

「ぼくたちは負けない。かくごしろ、モンスター！」

「うるさいガキだ。やつちまえ！」

いつせいに襲いかかってきた。アランは一番手前のおばけキャンドルに斬りかかる。

少年の細腕ながらこれまで何度もモンスターを倒してきたアランの力は、おばけキャンドルの身体を真つ二つに切り裂いた。

「ぎゃあああ！」

「はあああ！」

返す刀で次のモンスターを屠る。アランの脳裏には今、はつきりと父パパスの後ろ姿が映っていた。

「パパスならどうする？ どう動く？」

「お父さんはもつとはやい！ もつと強い！」

「こいつめえっ！」

脇から一体のおばけキャンドルが斬りかかる。アランの反応が若干遅れた。そのとき。

「 、マヌーサ！」

さあっ、と周囲を一瞬にして濃い霧が包み込んだ。霧はモンスター一体一体に絡みつき、視界を奪つ。さらには

「ザザツ！？ ガキが何人もいる！？」

「ど、どうなつているんだ！？」

おばけキャンドルたちは騒ぎ出した。彼らの目には、霧の向こうから何人ものアランたちが立ち向かつてくる幻が映る。慌てふためき、闇雲に幻を追つているうちに、彼らは一力所に固まり始めた。そこから漏れた者や幻の解けた者は、それぞれアランの剣やビアンカのムチによつて倒されていく。

おばけキャンドルたちがまるでひとつの団子のように固まつたとき

「いくよ、アランー！」

「わかつたよ、ビアンカ！」

ふたりは背中を合わせ、同時に攻撃呪文の詠唱に入った。
今ふたりが持ち得る、最大の力を持った呪文。

「 つ、燃えちゃえ、ギラ！」

「 つ、かけぬける、バギ！」

ビアンカの手からは溢れる炎の波が。アランの手からは鋭い風の刃が。

おばけキャンドルたちに襲いかかる！

「ぎゃああああああああああつー！」

長い長い悲鳴。

やがて炎と風が収まつたとき、モンスターの姿はすべて消え去つていた。

「おお……」

風が止み、炎が消え去ったホールで、静かなぞよめきが走った。
「何といふことだ」

「あんな小さな子どもたちが……」

「信じられん。これは夢だろうか」

口々に囁きあうのは、親分ゴーストの呪いによってこのホールに縛り付けられている使用人たちだつた。彼らの身体はまだ自由になつていながら、それでも幾分束縛が緩んだのかアランたちを遠巻きに眺めている。

驚き半分、不安半分の彼らに、アランは静かに語りかけた。

「もうだいじょうぶ。後は僕たちがなんとかするから。ぜつたい、『親分ゴースト』をたおしてみせるから」

「そうよ。そしたらみんな自由になれる！ 私たちにまかせて！」

ビアンカも言葉を重ねる。使用人たちのお互いに顔を見合させていた。

歓声は上がらない。静かなぞよめきが広がるばかりである。アランとビアンカは少しだけ不安そうに互いの顔を見た。

「どうしたんだろう。みんなあんまりうれしくなさそう」

「きっと、親分ゴーストが何かをするんじゃないかつて、不安なんだと思うわ。でも」

ビアンカは頭上を見上げる。

「このままじゃいけないよね。エリックさんたちのためにも、ここの人たちのためにも……そして、あの猫ちゃんのためにも」

「うん」

アランはうなずく。武器を構えたまま、二人は再び上の階に向かつて歩き出した。

すると

「……え」「……あ」

果然とつぶやくアランたちの前で、使用人たちがぐるぐると回り始めた。部屋の端で腰掛けていた者たちも近づいてきて、アランたちの頭上をさまよう。彼らは階上へ向かうホールの出入口に列を作った。まるでアランたちを見送るように。

彼らの無言の励ましを背中に受け、アランとビアンカは力強く一步を踏み出す。ぜつたに負けるものかと決意を新たにして

レヌール城の闇はもう、怖くはない。

『親分ゴースト』が居座る最上階まで一気に駆け上がった一人は、巨大な廊下を横切るモンスターの陰をとらえた。

「まで、『親分ゴースト』！」

アランが叫ぶ。『親分ゴースト』はちらりとアランたちを見ると、そのまま扉の向こう側に消えた。アランたちも走る。その扉は、アランたちが階下へと落とされた謁見の間から廊下を挟んでちょうど反対側にあった。

汗ばむ手をふたりでしつかりと握り合ってから、アランとビアンカは勢いよく扉を開けた。

途端に吹き付ける冷たい風。巨大なベランダに出た。

どこまでも広がる夜空の闇と星光を背に、『親分ゴースト』が仁王立ちしていた。ぼろぼろのマントが風にあおられはためく。「さぎさぎ……まさかこんなガキどもがここまでやるとは」

「さあ、あとはあなただけよ。覚悟しなさい！」

ビアンカが鞭を振りかざし啖呵を切る。『親分ゴースト』は背中をそらせて笑つた。

「かかかっ！ 威勢のいいこいつたなあ。だが、手下どもを何匹倒したところでこの俺には敵うまい！」

「そんなのやつてみなくちゃわからない！」

アランが剣を構えた。

「みんなのために、ここでおまえをたおす！」

「かあつかかかっ！ やつてみやがれクソガキがあつ！」

ついに『親分ゴースト』がアランたちに牙を向き、襲い掛かつて
きた。

27・親分ゴースト戦 前編

『親分ゴースト』の手が伸びる。骨だけとなつた指先が異常に伸び、鋭く尖つた先端がアランを襲う。受け止めた剣から重い衝撃が伝わり、アランは体勢を崩した。

「かーつ！」

尻餅をついたところへ『親分ゴースト』が覆い被さつてくる。剣を振り上げようとするアランだが、焦るあまり先端が石床を削るだけだった。

「アランッ！」

脇から伸びるムチ。『親分ゴースト』の手首に巻き付いて動きを止める。

「さあ、今のうちだよ！」

「しゃらくさいわ、小娘が！」

ビアンカに向き直つた『親分ゴースト』は空いた手でムチを掴んだ。そのまま強引に振り回す。ビアンカの軽い身体は簡単に宙に浮き、そのままアランに激突した。ふたりして空咳を繰り返す。

むきになつて立ち上がるビアンカに、アランは手を向けた。防御力上昇魔法『スカラ』をかける。魔法の防御膜がビアンカの身体を柔らかく包み込んだ。

「むりにつつこんじゃだめだ。ビアンカはそんなに打たれ強くないんだから」

「くつ、くやしいなつ」

「帰れなくなつたら意味がないよ。ふたりで帰るんだから」

そう言い、アランも自身にスカラをかける。そして一歩踏み込んだとき。

「、ルカ二ー。」

「えつ？」

どつ、と重くなる身体。反対に着ている服がひびく頼りなく感じられる。

防御力低下呪文『ルカニ』

アラン、という悲鳴と同時に『親分ゴースト』の拳が炸裂した。『おおきづち』から痛恨の一撃を受けたときは比べものにならないほどの衝撃。

気がつくと、アランの身体はテラスの端の方まで吹き飛ばされた。ビアンカが駆け寄り、抱き起こす。目が回って上手く立ち上がる「」ことができない。

か、回復を……しなきや。

そう思うが脳震盪を起こした身体では呪文の詠唱もままならない。『親分ゴースト』はゆっくりと近づいてくる。

「かか、かかかかかっ」

耳障りな笑い声が一人のところに届く。

アランは動けない。ビアンカもまたアランを抱えたまま動かない。

『親分ゴースト』の嘲笑が止んだ。どごめを刺す気だ。

そのとき、ビアンカが決然と顔を上げた。まっすぐにその掌を敵に向ける。一瞬『親分ゴースト』がひるみ、身構える。

ビアンカは短く詠唱を終わらせた。

「マヌーサ！」

『おばけキヤンドル』たちを惑わせた、幻惑の霧。絶対の勝利に油断していた『親分ゴースト』はその罠に完全にかかった。

「おおっ！？ これは……くそつ、小娘え！」

暴れる。その隙にビアンカはアランを抱きかかえて移動した。

『親分ゴースト』に位置がばれないよう、小声で語りかける。

「アラン、薬草だよ。今のうちにほら、飲んで。きずぐちにも塗つておくな」

「あ、ありが……と」

ようやく視界が戻ってくる。アランの目の前にあつたビアンカの顔は汗ばみ、これまで見たことがないほど真剣な表情だった。

強いね、と小さなつぶやきが聞こえる。

アランはうなずいた。だが、諦めない。ビアンカの声にも恐れの色はない。

ここで諦めたら何のためにエリックは、使用人の靈たちは、そしてあの哀しそうな女の人は、自分たちに願いを託してくれたのかわからなくなる。

絶対に負けないと決意したのか、わからなくなる。

「、スカラ」

残り少ない精神力をかき集め、アランは再び自らの防御力を引き上げた。これで『親分ゴースト』のルカニの効果がかき消される。今だ目標を求めて暴れ回る『親分ゴースト』の背に、アランとビアンカは決然と立ち向かった。

だが

「そこがあつ！」

音を聞きつけ、『親分ゴースト』が振った腕。そこから炎が巻き起こつた。

まずい、とアランは思った。これは呪文 複数の目標をその火に巻き込む『ギラ』。

目の前に壁のように広がっていく炎。

そのとき、視界の端で金色のお下げが揺れた。

ビアンカがギラの炎の前に敢然と立ち塞がつた。

ビアンカが大きく息を吸い込む。まるで自分を鼓舞するかのように、力強く一步を踏み出した。

腕を、振る。

「いっけええつ、ギラッ！」

巻き上がる炎。

ふたつの火の手が正面からぶつかり合った。

空気がきしむような音が響く。

額だけでなく、腕からも汗を浮かべながらビアンカは『親分ゴースト』の呪文を真正面から押し返そうとしていた。

「かーつ！」

相手もその意図に気づいたのだ。馬鹿にするなど言わんばかりに咆吼を上げる。

マヌーサの霧が、逆巻く炎に煽られて消えていく。ビアンカの表情が徐々に苦しげなものになっていく。

そして

「きやああああああつ！？」

どんづ、と爆発音が響き、黒煙が上がった。

衝撃でランダはびりびりと流れ、小柄なビアンカはそのまま地面に叩き付けられた。だが『親分ゴースト』も無事ではない。爆風に視界を奪われたのか、骨だけの目元を押さえて苦悶の声を上げている。

「ぐ、そつ。くそおおつ。小娘！ よくも！」

鋭い爪を伸ばしてビアンカにじりよる。その体全体から醜く濁った煙が滲み出している。それは夜の闇の中でもなお暗く、視界を奪うほどだ。

ふと、『親分ゴースト』の歩みが止まる。

何かに気づいて、左右を見る。

「……へへつ」

膝を突きながら、ビアンカが不敵に笑つた。

どこからか空氣を切るような音が近付いてくる。

「ざんねんでした。わたしは、ひとりじゃないんだから」

その言葉の意味を理解できず、完全に立ち止まる『親分ゴースト』。

空氣を切る音はどんどん近付いてきて。

どこから そう、上から。

がばつ、と顔を上げた『親分ゴースト』のすぐ目の前に、アランが振り下ろした剣の切つ先があった。

「これで」

驚愕する敵にアランは叫ぶ。

「おわりだあつ！」

「う……うおおおおおおおおつ！？」

全体重と落下の勢い、そして渾身の力を込めた一撃が『親分ゴースト』を脳天から貫いた。硬い骨を碎く感触にもかまわず、アランは自らの剣に力と思いの全てを込める。

やがてその切つ先は骨よりもなお硬いものにぶちあたつた。キンッ、と甲高い音を立て、同時に落下が止まる。

上から、下まで『親分ゴースト』の体を切り裂いたのだ。

ぶわあつ。『親分ゴースト』から濁った煙が吹き飛ぶ。

衝撃によるめきながら、アランは急いで離れる。ビアンカとふたり寄り添うように、固唾を呑んで『親分ゴースト』の様子を窺う。しばらぐ敵は止まつたままだつた。

「え……」

「…？」

アランの顔にさつと緊張の色が走る。ぎこちないながらも、『親分ゴースト』がこちらを振り向いたのだ。

今にも崩れ落ちそうな様子で、心なしか体の下半分も透けている

ように見える。だが、『親分ゴースト』はまだそこにいた。

「いちはやく、ビアンカが武器を構え直した。「なんどでも……」

とつぶやく彼女の瞳には強い意志が宿っている。

対するアランは『親分ゴースト』の様子を見て取ると、武器を構

えることなく数歩、近付いた。目前で、改めて剣を構える。

そのときだ。

「……ま、まいっただ……」

どこか情けない声で『親分ゴースト』はつぶやいた。満足に動けないのだろう。不自然な体勢のまま懇願してくれる。

「これ以上やられたら、本当に消えちまつ……。もうこの城にはちよつかい出をねえ、子分たちもみんな出て行かせる……だ、だから許してくれ。この通りだ」

「アラン！ ダメよ、そんなやつのいいなりになっちゃ！」

ビアンカが憤慨した声を上げる。

アランはじつと『親分ゴースト』を見る。アランを見返すモンスターは、心なしかさきほどよりも小さく見えた。

長いこと見つめ続け、そして『親分ゴースト』がかたときも目をはなさいことを見て取ったアランは、ゆっくりと剣を下ろした。

「いいよ。逃がしてあげる」

「あ、アラン！？」

「でも、もしまだみんなに迷惑をかけたら、そのときはやるやないからね。ぜつたい」

驚きの声を上げるビアンカを背に、アランはゆっくりと諭すよう『親分ゴースト』へ告げた。するとモンスターは脱力したように長い息を吐いた。

それから どうじうわけか少し親しげに アランに言った。

「へへっ……ありがとよ。あんた、いい大人になるぜ……」

その言葉とともに、『親分ゴースト』の姿がすうっと薄れていった。アランはその様子を見届けた。

同時に城全体から禍々しい気配も消えていく。

いつの間にか、夜明けが近付いていた。

ふと、夜明けの光とは別の輝きがアランたちに近づいてきた。

「……エリックさん？」

驚きの声を上げるアランに向かって、エリックは手を差し伸べた。彼の隣には、あの大きな部屋で見た女性の幽霊が浮かんでいる。彼女はエリック同様、ビアンカに向けて手を伸ばす。

アランたちは彼らの手を握る。朝霧を掴んだような感触とともに、一人の体はふわりと浮かび上がった。そのまま空中を走り、屋上へと運ばれる。

そこは、以前ビアンカが閉じ込められていた墓の前であった。

エリックが穏やかに微笑みかける。

『ありがとう。君たちのおかげでモンスターたちは去つた。これでこの城も平穀を取り戻すだろ？』

「そんな……」

アランははにかんだ。一方のビアンカは「あれだけ苦労したのだから、みんなで喜んでくれてもいいのに」となぜか不満気だ。その様子を見て、エリックの隣にいた女性がくすりと笑つた。初めて見る笑顔だった。

『……ようやく、この城に朝が戻つてきます。小さな勇者さんたち、本当にありがとうございます。この城にいる人たちを代表して、私たちがお礼を言います』

「もう、だいじょうぶなんですか？」

『ええ。あのときはごめんなさい。ろくにお話もできなくて……。モンスターの束縛が強すぎて、姿を現すのが精一杯だったのです。でも、これでやっと自由になれる……』

「そうだったんだ……。あれ？ でもエリックさんって、ずいぶん自由に動き回っていたよつな」

ビアンカが首を傾げると、女性は笑った。今度は困ったような笑顔だった。

『このひとは、昔から奔放なところがあつて……モンスターたちも、このひとの強引さにはいさか手を焼いていたみたい』

『こら。何を言うか。それでは私がモンスターより厄介な存在に聞こえるではないか』

ぶすっと不満を垂れるエリック。アランとビアンカは顔を見合わせた後、声に出して笑った。

取り戻せたのだ そう、心から思えた。

朝日が空に差し込む。レヌール城の屋上から見えるそれは、思わず言葉を失うほど綺麗だった。

『さて……そろそろ行くか。おまえ』

『はい。あなた』

「え、もう行っちゃうの？」

ビアンカが問う。エリックたちは首を縦に振った。

『私たちは、もう死んで魂だけの存在になつてている。モンスターたちに縛られたせいで長くこの地に留まらざるを得なかつたが、本来は神のもとへと召されなければならぬ』

『ここでお別れね』

女性が再び手を差し伸べてくる。アランとビアンカは、その手をしっかりと握りしめた。手応えはないのに、なぜか手の平がじんわりと温かくなる気がした。

やがてエリックと女性は、陽光が夜の闇を拭う様に合わせるように、ゆっくりと空へと昇つていった。音もなく輪郭が消えるまで、アランたちはじつとその行き先を眺めていた。

『……行っちゃったね』

「うん」

「いろいろあつて、いたい思いもしちゃつたけど……来て、よかつたね』

「うん」

ビアンカがうーん……と背伸びをした。

「さて、と。早く戻らなきや。あんまり遅くなつちやうどお母さん
に怒られちゃうわ。あのネコちゃんの」とも心配だし。……あら?」
ふと、ビアンカが墓標の根元を見た。アランも視線の先を追う。
そこには、朝日の反射で輝く宝石があつた。金色のそれは、見つ
めるだけで吸い込まれてしまいそうな不思議な力を感じた。

ビアンカが宝石を手に取る。

「綺麗な石……きっとエリックさんたちのお礼だわ。いらっしゃ
ましょ、アラン」

はい、と手にした宝石をアランに渡す。アランは首を傾げた。

「宝石だよね？ それはビアンカがもつていたほうがよくないかな
」「いいの。これはエリックさんのお礼だけど、私のお礼でもあるも
ん」

「ビアンカの？ ビーチ？」

「もう、あんがいにぶいのね、アランは。そんなことじや、大きくなつてもおよめさんがないわよ?」

呆れたように言つたビアンカを前にしても、アランには何のことか
わからない。そういうしている内に、ビアンカは半ば無理矢理アラ
ンの手に宝石を握らせてしまった。

「とにかく！ これはアランが持つてて。私たちが今夜、すうい冒
険をしたんだつて証に。私たちが力を合わせれば、こんなすうじこ
とができるんだぞつていうこと、アランにはずっと覚えていてほし
いから」

「……うん。わかつた」

「よひしー」

にぱつ、ビビアンカは笑つた。アランもつられて笑つた。
それから一人は歩き出す。

「じゃあ、かえりう」

「ええ。かえりましょう。アルカパに!」

30・ビアンカとの別れ

翌日

小さな子どもたちがレヌール城のモンスターを退治した、という噂は瞬く間に町中に広がり、アランとビアンカはちょっととした有名人になつた。もちろん、黙つて深夜に抜け出したことについてはビアンカの母親や、何とか風邪から回復したパパスからこいつひどく叱られた。それでも、アランとビアンカはまったく後悔していなかつた。

そして

「さあ、約束だわよ。あの猫ちゃんを自由にしてあげて」

町の広場で、例の二人組を前にしながらビアンカは胸を張つた。堂々とした彼女の態度に、男の子たちは顔を見合わせる。

「まさか本当にたいじしてくるなんて」

「そうだよなあ。……うん、わかった。この猫はあんたたちにあげるよ。約束だもんな」

そう言つて男の子のひとりが杭につないでいた紐を解き放つ。子猫は男の子に噛みつくでもなく、とことこと大人しくアランたちのところへやってきた。

ビアンカが子猫の頭を撫でる。

「よかつたね。もういじめられなくてすむよ」

「なあーご」

「あはは。返事したよ、この子。かわいいなあ」

「うん」

アランは生返事をしながら、じっと子猫を見つめていた。目が合ふと、優しく微笑みかける。もつだいじょうぶ、そんな思いを込め

た。

子猫がアランのもとにやつてくる。アランもまた、子猫の頭をゆっくりと撫でた。今度は鳴き声も上げず、子猫は大人しくされるがままになっていた。手を止め、アランが踵を返して歩き出すと、子猫は当然のようにその後ろについてくる。

「あ！」

突然、ビアンカが声を上げた。

「そうだわ、アラン。この子に名前をつけてあげなくちゃ」

「名前、かあ」

「そうね……ゲレケレってこうのはどう？」

アランは子猫を見る。きょとんと首を傾げられた。

「あんまり気に入つてないみたい」

「そう？ ジャあ、ねえ。アンドレは？ これならかつこいいでしょ」

「でも、この子は」

「なあに、これでもダメ？ ううーん、それじゃあかわいいやつで……チロル！」

「チロル」

アランは子猫を見る。大人しく座つてこちらを見ていた子猫は「なあ」と鳴いた。アランはビアンカに向き直る。

「うん。いいんじゃないかな」

「よし、決定！ ネコちゃん、これからあなたの名前はチロルよ。よろしくね！」

「「「」」」

チロルがビアンカの手をなめる。「あはは、くすぐったいってば」と笑うビアンカをアランは微笑ましげに見つめていた。

空を見る。太陽は頭上高く上がつていた。そもそもパパスと約束していた時間だ。

「行こう、ビアンカ。チロル。そろそろ戻らなきや。お父さんがまつてる」

「あ、そうね」

笑顔で応じたビアンカは、しかしすぐ口にしゃんとつづいた。

「でも、もうお別れなんだね。少し、寂しいな」

「だいじょうぶ。となりまちなんだから、すぐに会えるよ」

「うん。そうだね」

「もしよかつたら、チロルはビアンカがあずかつて」

と、そこまでアランが口にしたとき、チロルがビアンカの脇をすりと抜け出した。アランの足元で座り込み、なあー、と鳴く。まるで抗議しているようだった。

ビアンカが腰に手を当て苦笑にする。

「ダメよ。チロルちゃんはアランと一緒に居たって言つてるんだから」

「そつか。『めんね、チロル』

「なあー」……ぐるぐる

「ふふ。でも私もチロルちゃんには忘れてほしくないから……これをあげるね」

ビアンカは自らのお下げを結っていた一本のリボンを外すと、一本をチロルの首に優しく結びつけた。

もう一本をアランへと手渡す。

「これ、私のお気に入りなの。大切に持つていて。チロルちゃんとアラン、それから私。みんなずっと、ともだちなんだって証だよ」

「うん。わかった。大切にするよ、ビアンカ」

アランはビアンカのリボンを両手で握りしめた。なくせなにように、懐にしまつ。

「さ、行きましょう。お母さんたけにこれ以上怒られちゃつたらたまらないもの」

率先して歩き出すビアンカ。すれ違ひざま、涙の欠片が宙を舞つたことをアランは見逃さなかつた。

その後、ダンカンや町の人たちとの挨拶をすませたパパス、アラン、チロルは、その日のうちにアルカパを後にした。宿が見えなく

なみまでアランが手を振り続け、アランもそれに応えていた。

「のとそのアランは知る由もなかつた。

氣の強い、しかし誰よりも優しいこの幼なじみと再会するまでに、長い長い時間が必要になることなど

31 パパスが見た素質

「しかし、今回のこととは父も驚いたぞ」

パパスからそんな言葉が漏れたのは、サンタローズへの帰路をしばらく歩いた頃だった。

「まさか私が床に伏せている間に、たったふたりでモンスターたちを退治してしまうとは。しかも、話ではそのボスはかなりの強敵だつたという」

「でもお父さん、『親分ゴースト』は僕ひとりじゃ勝てなかつたよ。ビアンカや、城のひとたちのおつえんがあつたから、勝てたんだ」アランはまっすぐにパパスの目を見ながら言つ。それは紛れもない本心で、同時に隠すべきことではないとアランは直感的に理解していた。

パパスは一瞬、驚いたように目を丸くした。ふつ、と優しく微笑む。

「そうか」

「うん」

パパスのすぐ後ろを小走りについてくるアラン。その姿は、アルカバに到着したときよりも少しだけ大きくなっていた。

「……ところでアラン。その子猫のことだが」と、パパスが言いかけたそのとき。

草むらをかき分けて、突如として巨大なイタチのモンスターが現れた。三四。威嚇するように荒い鼻息を吐いていた。今にも襲いかかってきそうな気配だ。

唸るような金属音を立て、パパスは長剣を抜き放つた。前へ一步踏み出し、背中の息子へ声を掛けた。

「アラン、下がっている」

「ううん、お父さん。僕も戦う

言つなり、アランは銅の剣を構えた。自分から打つて出る真似はない。父の目の届くところで迎え撃つ姿勢を取る。「ふむ」とパパスは感心したように漏らした。

モンスターが一斉に襲いかかってくる。

数は多くとも、パパスの敵ではない。あつという間に一匹、斬り伏せてしまう。仲間の亡骸を踏み越えアランへと突進してきた一匹も、アラン自身の剣で退けられた。

モンスターは懲りずに波状攻撃をしかけてきた。先の一匹をさらには踏み越え、最後の一体がアランへと牙を剥く。

少しだけ反応が遅れた。躲せない。迎撃もできない。アランは咄嗟に防御の姿勢を取つた。

そのとき。

「ぐるるるうつー！」

「キイーッ！」

唸り声と悲鳴が重なつた。

何と、それまでアランの足元に寄り添つていたチロルが自ら前に出て、モンスターに攻撃を加えたのだ。予想外の反撃に油断したのか、首筋に爪の傷を受けたモンスターはあえなく後退する。

その隙を見逃すパパスではない。一息で間合いを詰めると、悲鳴を上げる暇も与えず一刀両断にしてしまつた。

「ふう……大丈夫か、アラン」

「うん。僕はへいき。でもチロル、すごいじゃないか」

再び足元に寄ってきたチロルを抱き上げ、アランは驚きの声を上げる。チロルは目を細めながら「なおん」と鳴いた。まるで胸を張つて自慢するように。

思案げに顎に手を当てていたパパスは、アランにたずねる。

「気になつていたのだが、その猫はアルカバの子どもが拾つてきたのだったな」
「そうだよ。でもいじめられていたから、何とかしなきやつて思つたんだ」

「だがアラン、その子猫はもしかしたら　　」

「言いかけ、パパスは口をつぐんだ。

「なに？　お父さん。チロルがどうかしたの？」

「いや。子猫にしては勇気と力があるなと感心していたのだ。ただ、まあ……チロルという名前がいかにも何と云つか……ずいぶんと可愛らしい名前をつけたものだと、思つてな」

「え？　でもお父さん、チロルは女の子だよ

「…………なぬ？」

ねーチロル、とアランが語りかける横で、パパスは畠然としていた。彼はまじまじとチロルを見るが、可愛らしい子猫といつ以外、雄なのか雌なのかさっぱり区別がつかなかつた。

「アランよ。お前はいつのまに子猫の性別を見分けられるようになつたのだ」

「うーん……？　なんとなく、かなあ。ほら、田のへりつとしたところとか、ふんいきとか。女の子なのは間違いないよ、お父さん」

「なんと……まあ……」

しばし呆然としていたパパスだつたが、ふいに遠い田をした。

「これもまた妻から受け継がれし素質、なのかも知れぬ

「お父さん？」

「何でもない、とパパスは言つた。

「さあ、先を急ぐぞ。不測の事態で皆には心配をかけてこるからな。早く戻らねば」

「そうだね。サンチョにチロルのこともしょうかいしなきや」

アランは笑いながら言つた。そうだそだと言わんばかりに、胸に抱かれたチロルも「なあむ」^ハと鳴いた。

32・不思議な落とし物

サンタローズに到着するや、入り口の番をしていた男が駆け寄つてきた。

「おお、パパスさん！ お帰りなさい。なかなか戻らないので心配しましたよ。風邪を引かれたとか。大変でしたね」

「いや、すまない。体だけは頑丈だと思っていたのだが、私も歳なのかな」

「何をおっしゃいますか。疲れが溜まつていたのですよ。ゆっくり休めという神様の思し召しでしょ？」

「本当に情けない。皆には心配をかけた」

そう言つてパパスは頭を下げる。いやいや、と男は手を振つた。「坊主もおかえり」という言葉に「うん」とアランは答えた。

「そういえば、先程から気になつっていたのだが……その手の物は？」パパスが首を傾げる。男の手には侵入者撃退用の槍の他に、なぜか小さな鍋が握られていた。男は鍋をかかげ、苦笑する。

「ああ、これですか？ ついさつき、そこで拾つたものとして。どうやらすぐその老夫婦のものらしい、これから届けようと思つていたのですよ」

「はて。持ち歩く小物ならまだしも、鍋が落ちていたと？」

「最近多いんですよ。ちょうどパパスさんたちがサンタローズを出られた頃からかな？ あちこちの家で鍋やらやかんやら食器やら、およそ落とし物にはなりそうにないものが次々となくなつていまして。そのどれもが、いつの間にか外に転がっているのですよ。そうですね、ちょうど」

男は宿屋の方向を指した。

「宿屋のグレイスさんの周辺にぽろぽろと。最初は子供ものの遊びだと思っていたのですが、村の子どもたちは皆本当に知らないようだ。

もちろん、グレイスさんには何の心当たりもないそうです。むしろ、彼自身が一番被害に遭われていることがわかっています

「ふうむ……」

「まあ、村の誰かに危害が加わったり、本当に生活に困つたりする事態にはなつていませんので、皆困惑しているところですよ」

「わかった。少し調べてみよう。大事ないとは思うが、万が一ということもあり得る。それから念のため、洞窟の見張りを強化するよう頼んでみてくれ。もしかしたら、いたずらなモンスターが洞窟から出てきているのかもしねからな」

「わかりました。お願ひします」

うむ、とうなづくパパス。彼等の会話の間、アランは後ろで大人しくしていた。チロルの毛並みをゆっくりと撫でながらつぶやく。

「ふしきなことが起きているんだね。でも、いくら危なくなくとも、みんな困つてるよね」

「なああ～？」

チロルが首を傾げる。アランは微笑んで、それから表情を引き締めた。

もし誰かのいたずらなら、大人よりも僕の方が見つけやすいかもしない。お父さんひとりで探すより、いたずらした人がはやく見付かるかも。そうしたら、そんなことしちゃダメだよって教えてあげないと。

ぐつ、と拳を握る。その使命感は、ひとえにレヌール城攻略で身につけた自信があればこそだった。

自宅の前では例によつてサンチョが待つっていた。またもや泣き顔である。パパスは彼を宥め、事情を話すとそのまま村の教会へ歩いて行つた。村に帰つた報告とあわせ、情報収集をするらしい。

「ねえサンチョ。僕もお父さんの手伝いをしに行つていい?」

アランが言うと、サンチョは少し驚いたように目を丸くした。

「大丈夫ですよ、坊ちゃん。ここは旦那様に任せておきましょう」

「でも、村の人は困つてゐるんでしょう？ 僕だって何かしたい」

「坊ちゃん……」

ふう、とサンチョがため息をつく。呆れた、といつよりも肩の力を抜いた、温かな表情を浮かべる。

「そこまでおっしゃるのなら、このサンチョのお願いを聞いてはくれませんか？」

「サンチョのお願い？ サンチョも困ってるの？」

「ええ。旦那様や坊ちゃんがお帰りになられると聞いて、温かい食事でもと思って支度をしていたのですが、つい先程まで使っていた『さじ』がなくなっているのです。たくさんシチューを作っていたのですが」

「え？ シチュー？」

アランの食いつきにサンチョは笑った。

「予備はあります、あのさじは長い間使っていた愛着あるもの。できれば探して欲しいのです」

「わかつた。さじ、だね？」

「はい。見付かり次第、『飯にしましょう。ですからあまり遅くならないように』

「うん。すぐにむどるよ。いい、チロル！」

「なあん！」

くくんくん、と匂いを嗅いでいたチロルに声をかけ、アランは勢い良く走り出した。

抜けようの青空。空気は澄み切つていて、どこまでも高く昇つていく。けれどその分、地上に吹き下ろす風はとても冷たかった。遊び盛りのアランであつても、ずっと外にいては体の芯から冷え切つてしまつ。サンチョの捜し物を求めて村の中を歩き回つたアランだが、なかなか芳しい成果が得られず、チロルを胸に抱いて途方に暮れていた。

「はあ……

自然、ため息が出る。そんなアランをチロルは心配そうに見つめていた。

ふと、顔を上げる。アランが休憩していたのは村の入り口にある宿屋の前だつた。寒さが応えていたせいもあつて、アランの足は自然と建物の中に向かつた。

「いらっしゃい。……おや、坊やじゃないか。どうしたんだい」

宿屋の主人が笑顔を向けてくる。だが、その顔には疲れが見えていた。アランは申し訳ない気持ちになりながら言う。

「うん。サンチョが使つていた『さじ』がなくなつちゃつて、僕、探していたんだ。でもずっと外に出てたら寒くなつちゃつて」

「そりゃいけない。待つてな、すぐに温かい飲み物用意してやるから

」

主人がカウンターの奥に消える。チロルを床に放したアランは、どことなくほつとした気持ちで椅子に座つた。

「そうだよね。あんなに優しいおじさんが、みんなのものをねすんだり隠したりしないよね」

でも、だつたら一体誰が、こんなことを

足元でじやれてくるチロルの背を撫でながら待つことしばし、宿屋の主人は頭をかきながら戻ってきた。その手には湯気の立つカツ

プが握られている。

「すまないな、坊や。本当はそこの猫にも飲み物を持つてこようと思つたんだが、今度は平皿がなくなつてたんだ」

「ううん。いいの。ありがとう、おじさん。……ほら、チロル。半分こしよう」

温かなミルクを一口一一口飲んでから、カップを差し出してチロルに分け与えた。その間、宿屋の主人は「おつかしいな……」としきりに咳きながら辺りを探していた。

「坊や。私は少し地下に降りてくるから、そこでゆっくりしてなさい」

「僕も行く」

アランが言うと主人は怪訝そうな顔をしたが、特に止める事はないなかつた。

主人の後をついてアランとチロルは店の地下に降りる。途端、お酒の匂いが漂ってきてアランは少し眉をしかめた。チロルが「ふしゅん」とくしゃみをする。

「ここは夜、酒場として開いているんだ。酒の匂いがきつければ、上がつていいんだぞ」

主人の言葉にアランは首を振る。そして彼に続いて辺りを探そうとしたとき

視界の隅に、人影を見た。

大人にしてはやや小柄で、カウンターの上でこちらに背を向けてしゃがみ込み、何やらごそごそとしている。あからさまに怪しいその姿に、アランは軽く身構えた。チロルも小さなひげをぴんと立てて、人影の方向を向いていた。

「ねえ、おじさん。あそこに誰かいるよ」「なに?」

振り返る宿屋の主人。彼はカウンターに視線をやつてから、ふい、と目を逸らした。

「何もないじゃないか、坊や。こんなときにからかつてはいけない

よ

「え！？ でも、たしかにあそこにある？」

「あー、ダメだ。やつぱり見付からない。坊や、ここにはやつぱりないよ。冷えるから、早く上に上がるんだ」

そう言つて、宿屋の主人はさつさと一階に戻つてしまつていた。アランは呆然とその様子を見送り、それでもう一度、今度は目を凝らしてカウンターを見つめた。人影は相変わらずこちらに背を向けている。間違いない、そこにいる。だけどよくよく見れば、その体の向こう側は少しだけ透けていた。

まさか、モンスター……？

一瞬、アランは考える。だがその人影からは『親分ゴースト』のような邪悪な気配は伝わつてこなかつた。チロルを見る。モンスターには敏感なこの相棒も、カウンターの人影をじつと見つめるだけで、警戒している様子には見えなかつた。

アランは意を決し、ゆっくりと人影に近づく。

人影は、カウンターの奥にあるいくつもの酒瓶を前に何かを考え込んでいるようだつた。

「ねえ

「きやつ！？」

ぴょん、と飛び上がる人影。勢い良く振り向いたその顔に、アランは「あ……」と声を漏らした。

お、女の子……？

「…………」

お互ひ、無言のまま見つめ合つ。今日の空のように深い青をした髪が印象的な少女だつた。年齢はアランやビアンカよりももう一回り上に見えた。

少女は辺りをきょろきょろと見回すと、自分自身を指さす。

『もしかしてあなた……私のことが見えてる？』

「う、うん」

うなずくアラン。しばらく呆然と固まっていた少女は、やおら両手を握りしめて喜びを爆発させた。

『ああ、よかつた！ よつやく私の姿が見える人間に出来たわ！』

「え、ええつと？」

「なあ？」

頭に疑問符を浮かべるアランの足元で、チロルが暢気に毛繕いを始める。この少女は敵ではないと認識したらしかった。満面の笑みで身を乗り出す少女が何か伝えようとしたとき。

「おーい、坊や。いつまで下にいるんだい？ ここは寒い。本当に風邪を引いてしまうよ」

宿屋の主人が心配して降りてきた。アランの前まで来ると腰に手を当て注意する。彼の視線はアランにだけ注がれていた。アランがちらと視線を少女に移しても、「こら、大人が注意しているのによそ見しちゃダメだぞ」とさらにお叱りの言葉が飛んだ。

アランは素直に頭を下げた。

「『めんなさい』。その……」じりじりと歩みを止め、じりじりと見切つて、「

「そうかそうか。気持ちは分かるよ。私も最初は物珍しさから始めたようなものだから」

じりじりと笑顔になる主人。アランは再び頭を下げ、「すぐにもどるから、心配しないで」とお願いして主人には一階に戻つてもらつた。

少女に向こうと、彼女は難しい表情を浮かべていた。

『やつぱり他の人間には私の姿が見えないみたいね』

「そうみたい」

『うーん。ここじゃ落ち着いて話もできないし…… そうだわ ぽん、と手を叩く。

『確かにこの村に、同じような地下室がある家があるわよね？ そこで改めて落ち合いましょう』

「地下室……もしかして僕の家かな」

『そりなの？ それならば好都合だわ！ じゃ、私は先に行つて待つてるからね』

「あ、ちょっと！」

すうつ、と姿を消しかけた少女をアランは慌てて呼び止める。

「あの、君はいつたい……？」

『ああ、ごめんなさい。自己紹介が遅れたわね』

少女はアランに向き直ると、につこりと花のよじて笑った。

『私はベラ。妖精族のベラよ。よろしくね』

34・ベラのお願い

家に戻ると、サンチョが笑顔で迎えてくれた。

「お帰りなさい、坊ちゃん。外は寒かったでしょう」

「へいき。それよりサンチョ。その」

「さじのことなら大丈夫ですよ。私は坊ちゃんのお心遣いを受けただけで、十分満足ですから。さ、これはお礼です。温かいミルクをどうぞ」

ゆったりと湯気の立つコップを受け取り、アランはちびちびとそれを飲んだ。ミルクはぬるめで飲みやすく、体の芯から温かくなつていった。アランはコップをテーブルに置き、床で嬉しそうにミルクを舐めているチロルを見つめながら言った。

「サンチョ。お願いがあるんだけど」

「なんでしょう?」

「地下室におりたいんだけど……」

「はて。地下室、ですか?」

サンチョは首を傾げた。やや怪訝そうに言った。

「それは構いませんが、必要なものがあるのなら私に仰ってくださいれば取りに行きますよ?」

「ううん。ちがうんだ。僕、地下室におりてみたいんだ。ええと……」

…

視線を彷徨わせた拳句、アランは苦しい言い訳を試みる。

「もしかしたら、地下室にあるかも知れないから。じつ」

「はあ」

生返事をするサンチョ。もっと何か上手い理由はないだろうかと

アランは頭を巡らせる。その様子を察したのか、長年パパスに仕えてきた彼はふっとため息をついた。

「わかりました。地下室の扉を開けて参りますので、少し待つてい

てください

「いいの？」

「特に危険はないでしょ？ 坊ちゃんがそこまで仰るのなら。ただ、下はとても冷えますので、できるだけ早く上がってきてくださいね」

「ありがとう、サンチョー！」

サンチョの微笑みにアランは笑顔を返した。しばらくして重い扉が開いた地下室に、アランはチロルと共に降りていぐ。

慎ましやかな一軒家の地下室である。その広さは一部屋分で、壁際には壺が荷物が積み上がっていた。サンチョの通り、室内はかなり寒い。

松明を壁に立てかける。チロルが部屋の中央に向かって「なあ」と鳴いた。

地下室の中央にベラが立っていた。

『ありがとう。来てくれたのね。えっと、アラン……でよかつたかしら』

『うん。でも、どうやってここまで？ 扉はしまつていたと思つけど』

『私の体は、人間界ではあってないようなものだから』

ベラの言葉にアランは首を傾げる。「子どもには少し難しかったかしら」とベラは笑つたが、すぐに真顔に戻つた。

『つと。こんな話をしている場合じゃないわね。実はねアラン、あなたにお願いがあるの』

『お願い？』

『そう。私と一緒に来てほしいの！』

拳を握りしめるベラにアランは困惑した。いきなり来て欲しいと言われても、どこに、何をしに行くのかさっぱりわからない。けれど、ベラの真剣な様子だけは感じ取ることができた。

『最初に会った時、私は妖精族だつて言ったわよね？ いま、私たちの故郷の村が大変なの。そのせいで、人間界にも影響が出ている。

でも私たちだけじゃどうにもならなくて。人間界の人に協力をお願
いしようと思つて私が来たんだけど、ここじゃ、妖精族の姿を見る
ことができる人間って限られているらしくて……。途方に暮れてい
たときに、偶然、あなたに出会うことができたの』

「でも、どうして僕に『

『私たちの姿が見えるのは、特別な力を持っている証だつて聞いた
事がある。あなたが私を見つけてくれて本当に嬉しかつた。あなた
なら、私たちの村を救えるかも知れない』

ベラの言葉にアランは黙つて耳を傾けていた。そんなアランに、
チロルがすりすりと顔をこすりつける。

「……困つているひどが、いるんだね？」

『ええ。私たちだけじゃなくて、人間界の人々も困つて
いるほか、すごく寒いでしょ？ 本当なら私たちが春を呼ぶはずなん
だけど、それができなくなつてる』

「春を……」

『だからお願ひ！ 私と一緒に来て！ そして、私たちの長に会つ
て！ ポワント様も、きっとあなたを待つてゐるはずだわ』

言い終えて、ベラはじつとアランを見た。アランはしばらく考
えた後、足元のチロルを胸に抱いた。「なあ」と短くチロルが言つ。
「……わかつた。いくよ、僕たち」

『ああ！ ありがとう』

「そのかわり、みんなから持つていつたものはきちんと返してあげ
てね」

あれ、ベラがやつたんでしょ、ヒアランが言つと、ベラは氣まず
そうに頬をかいた。

『ごめんなさい。私に気付いてもらひにはああするしか思いつかな
くて……でも、その必要もなくなつたから、もう大丈夫。約束する
わ。きちんと返すつて』

「よかつた」

アランが笑うと、ベラも優しげな表情を浮かべた。

『アラン、あなたは優しいのね。本当に良かつたわ。お願いできたのがあなたで』

その花のような笑顔を見ていると、何だか恥ずかしくなる。

ふと、ベラが指先を天井に向かってかざした。途端、松明の明かりしかなかった地下室に眩い光が満ちる。天井の輪郭がぼやけ、遙かかなたまで続く光の階段が現れた。

ベラがアランの手を引く。

『さあ、行きましょう。この先が私たちの故郷 妖精の村よ

光が、広がる。

足元を優しく包む不思議な階段を上りきった先で、ふと、体の重さが消えた。

さあつ……と冷たい風がアランの頬を駆け抜ける。

次の瞬間、足の裏が固い地面を踏みしめた。

「もう、田を開けていいわよ」

階段を上る間、ずっと手を引いてくれていたベラが言つた。まぶしさに目を細めながらアランはゆっくりと瞼を開ける。

「……うわあ……」

詠嘆した。

雲一つない快晴の下に見えたのは、薄く雪化粧をした巨大な木だった。幹が半分ほどで切り取られ、それまでに繁茂した枝葉がまるで上品なドレスのように木全体を覆い彩つている。ところどころに窓らしき四角いくりぬきが見え、そこから人影が見えた。

思わず、アランはベラにたずねる。

「あれ、もしかしてお家なの！？」

「ええ。そうよ。この妖精の村の長、ポワン様がいらつしやる建物

「すゞいー！おつきー！きれいだ！」

興奮したアランの声にベラは「ふふっ」と笑つた。

「じついうといふのはアランは子どもなんだね」

「でも本当にすごいんだもの」

「ありがとう。ポワン様も喜ぶわ。で、行きましょう。私たちが到着するのを待つていいはずよ」

手を引かれ、歩き出す。その後ろをひととじとチロルも付いていく。物珍しさは同じなのか、チロルもまた「なこなご」と鳴きながら辺りを見回していた。

地面から雄々しく張り出した根っこ、その表面に作られた階段を上る。途中振り返ると、妖精の村の全容を見ることができた。雪の積もった平野に切り株の形をした家が建っている。ベラと同じ、耳の長い妖精族が優雅に歩いていた。

妖精、というぐらいだから、羽が生えて空を飛ぶのかなとアランは思つていて、こうして見る限りは人間とそう変わらないようだ。誰もがみな優しそうで、あとは何故か女人の人が多くて

そこでアランは首を傾げた。どことなく、表情が沈んでいるように思えたからだ。穏やかな村の空氣も、よく感じれば体の芯に響きそうな冷たさをはらんでいる。アランは思わず一の腕をさすつた。

階段を上りきると、正面に大きな扉があつた。こんな扉が開くのかと思つていたら、ベラがその細い腕で少し押すだけで扉は滑らかに奥へと動いた。

幹の中は、これもまたため息が出るほどの美しさだった。氷のように滑らかで透明度のある壁がぐるりと幹の内側を覆い、いくつもの本棚が部屋の中に鎮座していた。広い。ビアンカの家の敷地より広いかもしれないとアランは思った。

円状の壁面に沿い、氷か水晶か、透明な結晶が螺旋階段となつて伸びていた。チロルを胸に抱き、アランはしきりに辺りを見回しながらベラの後に続く。途中、何人か妖精族の女性とすれ違い、その度に柔らかな会釈をされてアランは恐縮した。

二階、三階と上がつていき、最上階に昇るとそこは吹き抜けとなつていた。大空と逞しく生い茂る緑に抱かれているような錯覚をアランは抱いた。

ベラがすっと腰を折る。

「ポワント様。人間界の協力者をお連れしました

「まあ。可愛らしいこと」

アランはそつとベラの背中から部屋の奥を見た。何人かの妖精族に守られるようにして、木でできた大きな椅子にひとりの女性がしとやかに座っている。ゆったりとしたローブに全身をつつみ、大き

な髪飾りと豊かな髪、そして何より、すべてを包み込んでしまうような柔らかな笑みが印象的だった。

あの方がポワン様よ、とベラが小声で教えてくれる。

アランが何か言つより先に、ベラがポワンに向けて言つた。何故か慌てた様子だった。

「確かに彼はまだ子どもですが、他の人間にはない特別な力を持っています。現に、私が向こうで耳にした噂では、手強いモンスター相手にこれを退けたとか」

「良いのです、ベラ。私は見ていました」

やんわりとポワンが言つ。その声の響き自体が楽器のように聞こえて、アランは感心するばかりだった。

「アラン、と言いましたね」

ポワンが呼ぶ。はい、と返事をしてアランは彼女の前に進み出た。ポワンはしばらくの間、アランをじっと見つめていたが、「なるほど。あなたからは不思議な力を感じます。特にその瞳……特別な力を持っているというのも、うなずける話ですね」

「……？」

「ごめんなさい。本当なら、このようなことを頼むのは心苦しいのですが……私たちの願い、聞いてはもらえませんか」

アランは黙つて話の続きを待つた。ポワンはひとつうなずいてから、言う。

「実は、この村で大切にしていた宝物を、とある者に奪われてしまつたのです。宝物の名は『春風のフルート』……これがなければ、妖精の村はもとより、人間界に春を呼ぶことができません」

「春が、よべない？　じゃあ、サンタローズがこのとじりはずつとさむいままだつたのは」

「ええ。『春風のフルート』が使えないのです」

アランは目を見開いた。まさか、春の訪れに妖精の力があつたなんて思いもしなかったのだ。大変なことだとアランは思った。

ポワンの表情に真剣さが宿る。

「お願いです。盗まれた『春風のフルート』を取り戻して欲しいのです。この村と、そして人間界に春を呼ぶために」

話を聞き終えたアランはポワンの前を後にした。隣には、引き続きアランと共に行くようポワンから指示されたベラが歩いている。

「ポワン様は、今回の事件にとても心を痛められているの」

最上階から下りる階段を歩きながら、ベラが言う。アランが目線で理由を尋ねると、彼女は小さくため息をついた。

「私たちの村は、まだいいわ。このくらいならみんな耐えられるから。けれど、人間界はそうはいかない。農作物は育たないし、となると動物たちも食えてしまう。単純に、寒さだけで命を落としてしまうこともあるかもしない」

「あ……」

「それはとても大変なこと。だけどね、それと合わせてポワン様が悩んでいることがあるの」

階段を下りかる。鏡のようになじみ透かれた床をしづらしく無言で歩き、

そのまま、表へ出た。太陽の光が瞳に眩しい。

「実を言つとね、『春風のフルート』を盗んだのが誰なのか、おおよそ見当はついてるの」

「えつ！？ そうなの？」

「ここの村の西、山脈の裾野にある洞窟。そこに『ザイル』って名前の人間の子がいる。おそらく、フルートを盗んだのはその子……村の中に、何人か姿を見た人がいるし」

「じゃあ、その子に会つて『春風のフルート』を返してもらおう！」勢い込んで言うと、ベラは少し悲しげに微笑んだ。アランは眉をハの字にした。

「……ダメなの？」

「いいえ。どんな理由があろうと、盗んではいけないものを盗んでしまった。だから取り返さなきや。それは絶対にしなきゃいけない

ことなんだけど

そこまで言いかけたとき、ふいにベラを呼ぶ声がした。村の妖精の一人が、ベラに駆け寄る。

「ごめん、ベラ。ザイルの奴、見失っちゃって……。北に向かつたまでは確かめたんだけど」

「いいよ、無理しないで。助かつたわ。あの辺り、最近モンスターがよく出没するようになつて危険だつたでしょう？ ケガはなかつた？」

「うん。大丈夫」

「そう、良かつた。それにしても北、か。おそらく氷の城に向かつたんでしきうけど……困つたな。あそこは確か――」

友人らしい妖精と何やら相談を始めるベラ。「少しだけ待つて」と彼女に言われ、アランは切り株状の一軒家に足を向けた。ちょうどそこで、老人が一人たき火に当たつていたのだ。そばには何とスライムまでいる。だがアランは恐れなかつた。そのスライムからは、以前サンタローズの洞窟で出会つたスライムと同じ、敵意のない、穏やかな気配を感じたからだ。

「ここ、いいですか？」

「ああ、いいとも」

老人が言う。胸に抱いていたチロルを下ろし、アランはたき火に手をかざした。雪化粧の割には寒さは感じないとは言え、何となく、火に当たるとほつとした。チロルも大きくあぐびをする。

そんな二人（一人と一匹）を微笑ましげに眺めていた老人だが、ふと、その表情が怪訝に染まつた。

「んん？ 坊や、君が一緒に連れているのは……」

「あ、はい。チロルつていいます。僕の大切なともだち

「なああうつ！」

「友達……ほおつ、これは。これは驚いた！」

アランは首を傾げる。老人の顔には驚きと微かな畏怖が見て取れた。

「坊や。この子がどういう種族か知っているかい？」

「？ ううと。ネ「じゃないの？」

「その子はキラーパンサー 別名『地獄の殺し屋』と言われる種族じゃよ。間違いない」

アランは絶句する。チロルがちらとアランの顔を見上げた。目が合つと、アランは驚きの表情をゆっくりと溶かして、チロルの毛並みを撫でた。

老人が咳払いをする。

「あー、ごほん。すまんかった。その子の目を見れば、人に危害を加えるようなものではないことぐらい、儂にもわかる。だがあの獰猛な種族が、まだほんの子どもとはいえ人になつくなど信じられんわい」

「チロルはチロルです」

「なあ」「」

「すまんすまん」

老人は笑顔を見せ、それからじっとアランの顔を見つめた。

「……坊やは、どうやら不思議な力を持つているようじゃ」

「ときどき、言われるよ。けど僕は僕だから」

「そうか。偉いの。おそらくその力は天から授けられたものじゃろう。大切にしなされよ。いつまでも、な」

そう言つと老人は目を閉じた。

「アラン！ お待たせ」

しばらくして、ベラが戻ってくる。アランはぽんぽんとチロルの頭を撫で、半分眠りかけていた相棒を起こす。

「あ」

「？ どうしたの」

アランはベラが持っていた武器に声を漏らす。かつてサンタロー
スの洞窟でスライムからもつたものと同じ、『かしの杖』だ。ア
ランの視線に気付いたベラが、若干緊張した表情でうなずく。

「私、金属武器は苦手なの。でもこれなら使い慣れているし。大丈
夫。戦いはあまり得意じゃないけど、あなたに負担はかけないわ。
そうはいつても私の方がお姉さんなんだし、頼ってくれていいのよ
」

「……ふふつ」

どこかで聞いたような台詞にアランは笑った。ベラが首を傾げる。
チロルはチロルで、アランを守るのは自分の役目だと言わんばかり
になごなごと鳴いていた。

アラン、チロル、ベラの三人（一人と一匹）で妖精の村を出発し
た。

一面の銀世界となつた平原を歩く。人間世界に降る雪とはまた違
うのか、踏みしめると砂のように柔らかな感触が返ってきた。素足
のチロルも冷たさは感じないらしく、軽い足取りでついてくる。

「本来、この雪はポワン様が春を呼ぶと同時に消えてなくなるもの
なの。今は『春風のフルート』が奪われたせいで、まだ消えずに残
っているのだけれど……このまま状況が変わらなければ、いずれは
人間世界のように寒さを感じるようになるかもしれないわ。雪が腐
つしていくの」

初めて聞く表現ながら、アランは容易にその姿を想像することが

できた。重く、湿った塊になつていく雪……それはこの美しい光景を一変させてしまうだろう。

先頭を歩くベラが、ふと足を止めた。

「それに、春が呼べない影響は景色だけじゃないから

強ばつた声で、彼女は『かしの杖』を構える。

目の前にモンスターが現れたのだ。その姿を見たアランは思わず咳く。

「り、りんごのぱけもの……？」

姿形はまさに果物のりんごそのもの。だが表面にははつきりと田口が見え、特に口は巨大で鋭い歯がびっしりと並んでいた。

「ガップリンよ。彼らだけじゃないけど、もともとこの辺りのモンスターはとてもおとなしい。なのにここ最近、よく私たちを襲つようになつた。アラン、下がつて」

口をしきりに動かし、硬質な音を立てて威嚇するモンスターに、ベラは『かしの杖』を握りしめて集中する。彼女の周辺が熱を持ち始めた。

「、まあ食らいなさい！ ギラッ！」

火炎魔法。振り払つた杖の先から炎が帯となつてモンスターに襲いかかる。甲高い悲鳴を上げ、ガップリンはひっくり返つたまま動かなくなつた。

額の汗をぬぐうベラ。直後、足元でチロルが鋭い声を上げた。

「ぐるるつ！」

「えつ！？」

ベラの側面。茂みになつた場所から突如、別のモンスターが襲いかかってきたのだ。黄土色の体に鋭い爪、なにより口から垂れ下がつた長い長い舌が目に焼き付く。

『つちわらし』だ

不意を突かれたベラはとつさに頭を守つた。だが、いつまで経つても衝撃は訪れない。恐る恐るベラが目を開くと、そこには悲鳴を上げる間もなく一刀両断されたモンスターの姿があつた。

光となつて消えていく『つちわらじ』を背に、アランは控えめな笑みを見せる。

「だいじょうぶ? ベラ」

「え、ええ……。あのモンスターはアラン、あなたが?」

「うん。チロルが注意してくれなかつたらあぶなかつたよ。お父さんもよく言つてた。『樂に勝つたときほど氣を引き締めるのだ』って」

「そ、そうなの……」

「僕は一回失敗しているから、同じ失敗はくりかえしたくなかったんだ」

そう口にしながら、アランは初めてスライムと戦つたときのことと思い出していた。

ベラがゆっくりと表情を崩す。何故か、大きなため息までついていた。

「ありがとう。助かつたわ。それにしてもすごいわね。噂では聞いていたけど、これほどだなんて」

「そんなことないよ」

「ううん。とつても心強い。お姉さんぶつて前に出てた私が何だか恥ずかしいわ」

こつん、と自らの頭を小突くベラ。ついでに舌まで出してしまつその茶田つ氣ある仕草に、ベラはもともとこういう性格なのかなとアランは思った。人間界での活動がどこか子どもイタズラじみていたのもうなづける話だった。

氣を取り直したのか、ベラが晴れやかに言つ。

「さあ。まずは西の洞窟に向かいましょ。ザイルのいる宮殿に入る方法が、そこにあるはずよ」

歩くことしばらく

三人の目の前に、洞窟の入り口が現れた。巨大な岩をくりぬいたような、きれいな半円形の入り口である。森の直中にあり、辺りは水を打つたように静かだ。

チロルがしきりに地面の匂いをかいでいる。その様子を眺めていたアランに、ベラが声をかけた。

「下の地面、草が踏み固められているのがわかる?」

「そういえば、」

「この洞窟に人が出入りしている証拠よ。アランもこれからいろんなどころを冒険するなら、覚えておいたほうがいいわ」

素直につなずくと、ベラは笑った。

「さあ、入るわよ。人が入れる場所だと言つても、中はモンスターも棲みついている。気をつけましょう」

階段状にきれいに磨かれた石の上を歩く。洞窟特有の、ひんやりとした空気がアランの肌を撫でた。

足を踏み入れてすぐ、アランは驚く。

「これは……」

辺りを見回した。比較的広い道。半円状になつた天井は大の大人が通つても十分な高さがある。サンタローズの洞窟には道の脇のあちこちに抱えるほどの岩が転がつていたが、それも見当たらない。

アランが驚いたのはその小綺麗さだけではない。

見えるのだ。そういった洞窟内部の様子が、はつきりと。

松明もないのに、明るい。まるで岩肌 자체が柔らかな光を放つていてるかのよう。

「どうか。アランは初めてなのね」

「明るい。どうして? 僕が入った洞窟は、たいまつがあつたから

明るかつたのに」

「私も名前や原理は知らないのだけど、大昔に高名な冒険者が訪れた洞窟にこのような『光る仕掛け』を施したらしいわ。私たち妖精族は人間と比べて比較的長命だけど、そんな私たちでも記憶の彼方になってしまふほど遠い昔のこと。時折、こうしてその仕掛けが残つてゐる場所が見付かるの。この西の洞窟もそのひとつ。もっとも、後で手は加えられたらしいけれど」

人間界にも残つてゐるかも知れないわね、とベラは言つた。アランはただただ驚くばかりだつた。チロルはどこか落ち着かないのか、しきりになごなごと唸つていた。

視界が良好なせいか、歩を進める足も心なしか軽い。

道中にあつた立て看板の文字が読めず、ベラに代わりに読んでもらつ。内容は大したものではなかつたが、まだ十分に文字の読みないアランに、ベラは優しく教えてくれた。

明るい道に、新しい発見。思わず心が弾んで鼻歌を歌いかけ、ベラに注意されてしまつた。首をすくめるも、何だか恥ずかしい気持ちになる。

アランには、きょうだいがいない。ビアンカは年齢的には上だが、アランの気持ちとしては年の近い幼なじみだ。こんなふうに『お姉さん』な誰かと一緒に旅をするなんて、今まで考へもしなかつた。僕にお姉さんがいたら、こんな感じなのかな……とアランは思つた。

アランの気持ちを察したのかどうか、足元でチロルが服の裾を引つ張つた。「あたしがいるじゃない」と言つてゐるように見えた。

「そういえば、アランはお父様と冒険しているつてことよね」

ふと、ベラがたずねた。

「こんなに小さな時から一人で世界を回るなんてすごいことだわ。危険なことも多いはずだけ……どうしてあなたのお父様は旅に出ようと思つたのかしら」

細い指先を顎にあて、小首を傾げるベラ。

アランはかつてビアンカにも話した内容を告げた。父は母を探しているようだ、と。

話を聞いたベラはビアンカと同じく、氣まずそりて頭を伏せた。だが、すぐに顔を上げる。

「事情はよくわかるわ。でも、私から言わせたらアランはまだ遊びたい盛りじゃない。友達も回りにいない中で世界中を歩き回るなんて、ちょっと可哀想だわ」

「でも、僕は大丈夫だよ。さびしくなんかないよ」

「アランはいい子ね、本当にほひやんとお父さん元甘えない」とダメだよ

そういうものだらうかとアランは思つ。確かに同世代の子どもたちと一緒に遊んだりといつ記憶はアランにははなしいが、父はずっと一緒にいたのだ。守つてくれたのだ。父の背中を見て、それを追いかけることは、アランにとってひとつの中でもある。

「……まあ、あなたのお父様はきっとどんなでもない人なんでしょうけど

「え？」

「ううん、何でもない。ひとつ」とよ

ベラは首を振つた。それから、少しだずらつぼく微笑む。

「じゃあ、この旅が終わるまでの間はお姉さんに甘えていいからね。」
うつ見えて、生きてる年数で言えばあなたよりずっと上なんだから

「うーん」

「あ、なあにその反応。失礼しちゃうわ

ベラがむくれる。その愛嬌のある仕草に、やつぱりベラもお姉さんって感じじゃないのかなとアランは思つた。それはそれで、心地良い気持ちだつた。

足元でチロルが「あたしを忘れるな」と再度抗議の声を上げていた。

「そういえば、この洞窟にはなにがあるの？」

アランはたずねる。『春風のフルート』を盗んだザイルという者は、西ではなく北の宮殿に向かったはずだ。

ベラの表情が少しだけ険しくなる。

「その昔、高名なドワーフの職人がこの洞窟の奥深くに、ある秘術を封印したの。それを習得すれば誰でも錠を解くことができると思う『カギの技法』と呼ばれるものよ」

「カギの技法？」

「ザイルの向かつた宮殿の入り口は固く閉ざされている。だけど『カギの技法』があれば、宮殿の入り口を開け中に入ることができるようになる。ただ、今までカギをこじ開ける技術なんて必要としていなかつたから、私たちの誰もその技術を身につけていないくて、だからまずは『カギの技法』を手にいれる必要がある、とベラは語る。

何だか泥棒さんみたいだなとアランは思つたが、それ以上にベラの表情が気になつていた。

「そのカギの技法を身につけることって、ベラにひとつではないことなの？」

「そんなことはないけど……まあ、ドワーフが編み出した技術ってところはあんまり気に入らないって言えば気に入らないけれどね。ただそれ以上に、この洞窟は……」

そこで口をつむぐ。アランは首を傾げた。

「なに？」

「……そうね、この先の話は、実際に会つてから話をした方がいいかもしないわね。アラン、少しだけ寄り道するわよ」

「え？ どうこうこと？」

「あなたに会わせたい人がいるのよ。その人に会つことも、この洞窟に来たもうひとつの中だから」

それつきりベラは黙り込む。表情は険しいというより、どこか悲しそうに見えた。アランもそれ以上は詮索せず、黙つて彼女の後に続く。

しばらくすると、洞窟の明るさとはまた別の、松明の光が見えた。岩壁に開けられた大きな穴から漏れてきている。

アラン達は穴の奥に足を踏み入れる。そこは四角い空間となつていて、綺麗に整えられた調度品が据えられている。寝台もあり、絨毯もあつた。誰かの居室となつてているようだ。

中央の丸テーブルに、ふたつの影がある。

「あつ、ようせいだ。ようせいがきた！」

テーブルの上で丸い体を弾ませたのはスライムだった。敵意は感じない。妖精の国のスライムはみんな子なのだろうかとアランは思う。よくよく目を凝らすと、かなりやんちゃな顔つきにアランには見えた。

その隣、木製の椅子にゅつたりと腰掛けたひとりの老人が、同じくアランたちに気づいて声をかけてきた。

「これはこれは。妖精族の方が、わしに何か用かな？」

「お久しぶりです、長老」

「おお、その声はベラか。こんな穴蔵で生活していると、外のことには疎くなつていけない。しかし今日はどうしたことかね。どうやら脇にいるその子……妖精ではないな、人間の子かい？」

「ええ、その。ザイルのことで」

少々固い声でベラが告げる。妖精族とドワーフ族は仲が良くないという話をかつて絵本で見たことがあったが、本当なのかも知れないとアランは思った。

ベラの袖を引く。

「ねえベラ。この人は」

「この人はこの辺りに住むドワーフ族の長だった人よ。昔、妖精の

村と一緒に住んでいたの

「え！？ そうなの？ でもドワーフたとほ仲が悪

言いかけ、アランは慌てて口を開いた。ドワーフの長老は苦笑

いする。

「べラ。おまえささ、この子に肝心なことを伝えてなかつたようじ
やな」

「……。実際に会つて、話をした方がいいと思つて」

「そりやな。……坊や、名前は何と言う？」

尋ねられ、アランは名乗つた。正面から彼の表情を見ると、とても
もベラが嫌がるような気性の持ち主には見えない。

長老は目を細めた。

「よい瞳をしている。不思議な瞳だ。わしはドワーフのゴース。昔、
ボワン様のもとでザイルの面倒を見ておつた者じや

アランは驚きに目を見開いた。

「坊やは、わしらドワーフ族と妖精族とは仲が悪いと思っているようじゃが、半分は間違いだ。少なくとも、わしらは妖精族と共存できていた。ポワン様という立派なお方の元で」

「ええ。それは、間違いないと思うわ」

「ゴースの言葉にベラもうなづく。

「ただ、何と言うのか、妖精族とドワーフ族つて、結構考え方が正反対だつたりするのよ。だから個人的にそりが合わないっていうのはあつたと思う」

「そうじやな。だがポワン様はそんなわしらでも温かく迎えてくださつた。感謝こそすれ、恨むようなことは決してない。本来はな」

「あの……一人とも、いつたい何の話をしているの？」

アランは不安を表情に滲ませてたずねた。するとベラがアランの肩に手を置く。

「ゴースさんの言つ通り、ポワン様は村のすべての人平等に接していくださる。種族関係なしに。だけどある日、ささいな行き違いからひとりの男の子の心を傷つけてしまったの。それが、ザイル」「どういうこと……？」

ベラはうつむいた。アランの髪の先を撫でながら、彼女は語る。「ザイルはまだ赤ん坊の時、人間の親に捨てられたの。そこを、またま人間界に來ていたゴースさんに拾われたのよ。ゴースさんや仲間のドワーフたちは彼にとても良くしていたわ。ただ……私たち、妖精族の方が捨てられた人間に子に対してもどのように接したらいいのかわからなかつた。そういう時期があつたの」

かつての妖精族の村は、種族間の対立が少なからず表に出ていたらしい。

親に捨てられ、妖精族に邪険にされ。ザイルは自然と育ての親で

あるドワーフの考え方には傾倒していった。

ただそれも、ポワントが村を正式に治めるようになつてからは種族間で表だって対立することはなくなり、ザイルも少しづつ 本当に少しづつ 他の種族にも心を開くようになつていった。

そんな矢先のこと。

「あるドワーフが大切にしていた武器が何者かに奪われたの。それだけじゃなく、現場に居合わせた妖精族がひどいケガを負つた。ドワーフが自分たちの作った武器を盗むなど考えられない。一方で、妖精族が同族を襲うことも考えられない。……怒った一部の妖精族が言つたわ。『これは人間、ザイルの仕業に違いない』って」

「そんな！」

「もちろん、それに反対する妖精族も多かつた。ポワント様もきっと同じ考えだつたはずよ。だけど……この事件をきっかけにして、今までポワント様が抑えていた不満が今にも噴き出しそうになつたのよ。これ以上平和なこの村を疑心暗鬼で覆いたくない。ポワント様とドワーフは話し合い、ほどぼりが冷めるまで別々の場所に住むことに決めた。もちろんザイルも。そうすることで、妖精族の怒りの矛先がザイルに向かうのを防ごうとしたの」

「だが、それは返つてザイルの心に闇をかぶせるだけになつてしまつた」

ゴースが言葉を引き継ぐ。

「村を離れて、いくらもしない内だつた。わしの元を出たザイルはポワント様から『春風のフルート』を奪い、いざこかへと姿を消した。おそらく、北の宮殿へ」

「知つてるの？」

「なに、他ならぬ息子のことじやからな」

驚きの声を上げるべ方に、ゴースは小さく笑つてみせる。だが、そのささやかな笑顔もすぐに翳つた。

「だがわしには、今回のことがあの子だけの考え方とはどうしても思えない」

「え？」

「わしのところを去る直前まで、確かにあの子はポワント様を恨んでおった。ポワント様のせいでじいちゃんが追放された、とな。だがそれでも、あの子は優しい心根を取り戻しつつあったのじゃ。それがなぜ、急にあのよつたこと」……」

しわがれた手で、顔面をゆっくりと一度、なでつける。指と指の間から重いため息が聞こえてきた。

「あの子に、ザイルに何かよからぬことを吹き込んだ奴がいるのではないかとな」

「……それは、考えもしなかった」

ザイルの事は私たちにも責任があると思つていたから、とベラはつぶやく。アランはベラを見上げた。ここまで道のりで、時折暗い表情を浮かべるのはそういう理由だったのかと気付く。

アランは、言った。

「会いに行こうよ」

「アラン？」

「会いに行こうよ、ザイルに。心がやせし子なら、会って話をすればきっとわかってくれるよ」

まっすぐにベラを、そしてコースを見つめる。

まん丸に目を見開いていたコースは、やがて静かに目を細めた。
「そうだな。私はもうこの年だ。いかに頑丈なドワーフといえど、足手まといになってしまつ。だが坊やなら……その不思議な瞳の力なら、ザイルの心を開くことができるかも知れないな」

「うん。頑張る」

「ほつほつ。本当に素直ないい子だ」

「そうでしょ？ 私の自慢の弟分なんだから
ベラが胸を張る。間に挟まれたアランは心持ち顔を赤らめ、照れ
たように頬をかいた。

41・中央突破！

「『ースさんの話だと、『カギの技法』はこの洞窟の一番下、宝箱の中に保管されているやうよ」

「宝箱……もしかして、カギの開け方が書かれた本がはいつているのかな？　どうしよう、僕は字が読めないよ」

「そこは心配要らないわ。私があるし。それに、『カギの技法』はもともといろんな人が自由に使えるように編み出された技だと聞いているわ。だつたら、アランでも身に付けられるような仕掛けがあるかもしない」

「この洞窟みたいに？」

「そういうこと。や、行くわよ。宝箱に辿り着くまでが大変なんだから」

「うん。チロル、君もいいかい？」

「いやうー！」

とうぜん、と言わんばかりにチロルが自信満々に返事をする。

『ースの部屋を出て、アランたちは洞窟の地下を目指した。良く響く足音を聞きながら、アランはかつてサンタローズの洞窟を冒険したときのことを思い出していた。あのときも不安と期待と興奮に胸を躍らせて歩いたものだ。今の自分は、あのときより少しは成長できたのだろうかとアランは自問してみる。

途端に、『おおきづち』から味わった苦い経験が脳裏に蘇った。

「アラン？　どうしたの」

「ううん。何でもない。この先は僕にとってぜんぜん知らないところだから、気をひきしめなきやつて思つたんだ。それだけだから、心配しないで」

「頼もしいわね。本当にアランって、たくさんの冒険をしてきたのね」

ベラが褒める。その口調には慈しみの響きが籠もつていた。アラ

ンは少しだけ笑つてから、すぐに表情を引き締めた。階下に降りる階段に差し掛かつたときには、腰に提げていた剣を引き抜き、両手に構えたまま慎重に歩を進めた。

チロルが首元をアランの足首にこすりつける。早く行こうよ、と急かしているようだつた。

「わかってる。チロル、敵の気配がわかつたら教えて「にや」

階段を下りきつた。ドワーフの洞窟の特徴なのか、壁面は滑らかに整えられている。道は左右に一つずつ。奥に向かつて緩やかに湾曲している。

ううー、とチロルが唸り始めた。直後、アランたちのものとは別の足音が耳に届く。いや、足音だけではない。ばさばさ、と羽音らしき物音まで聞こえてきた。アランが剣を構え直す。

「待つて。静かに」

ベラがアランの肩に手を置いた。

「『』の音……モンスターは一匹だけではないわ。それに羽根の音もする。いけない、『メラリザード』が混じっているかも」「メラリザード？」

「呪文を使うモンスターよ。その名の通り、メラの呪文が使えるの。連発はできないみたいだけど」

アランは、と肩を震わせた。レヌール城でビアンカが見せた呪文はアランの記憶にも新しい。あれが自分の身に降りかかると考えると、ぞつとした。

「やりすごしましよう。さいわい、モンスターたちは道の片方に固まっているみたい。反対側の道を進むわ。喋らないで、静かにね」
うなづく。気配を探るためか、ベラが先頭に立つて歩き始めた。彼女は隠密行動が得意なのか、見事に足音ひとつしない。アランはチロルの柔らかな毛並みを胸に抱いた。彼女はすでに臨戦態勢に入つていて、歩くたびに爪が地面をこすつて音を出していたからだ。
ううー、と再びチロルが唸る。頭を撫でながら「しづかに」とア

ランは言うが、珍しく彼女は黙り込む様子を見せなかつた。モンスターが近くにいるから気が立つてゐるのかと思い、そしてふと、顔を上げたときである。

「目の前に逆さまになつた『つちわらし』の顔があつた。

「うわああつ！？」

チロルを思わず取り落とし、悲鳴を上げる。同時に主人を守ろうとチロルが『つちわらし』に襲いかかつた。

「こやああつ！」

「ギヒイイ」

「ちょ、アラン！？」

いきなり勃発した戦闘にベラが大いに慌てた。彼女の背中に自らの背中を預け、アランは激しく鼓動する自分の胸を必死になつて鎮めた。ベラが嘆息する。

「もう、あれだけ静かにしてつて言つたのに」

「ごめんなさい……。あんなに敵が近づいていたのに氣づかなくて。ベラが前にいてくれたから安心しちゃつたみたい」

「…………」

「……。もしかしてベラもまつたく氣づかなかつた？」

「ほん

咳払いをひとつ。彼女は年長者の威厳を持つて言つた。

「とにかく、こうなつては戦闘は不可避だわ。アラン、囮まれる前に勝負を決めるわよ」

「うん。でももう囮まれてゐるみたい」

気まずそうにアランが言う。その言葉通り、細い通路の前後にモンスターは回り込んでいて、完全に挟撃の状態となつていた。威厳をかなぐり捨て、ベラはヤケになつたように叫ぶ。

「中央突破！」

「うん、わかつた」

チロルを従え、アランは地面を蹴つた。

アランの剣技、チロルの素早い攻撃、そして何より複数の敵を一度に難ぎ払うベラの呪文によって、アランたちは何とか包囲網を脱した。油断なく背後を警戒するアランの側で、ベラが大きく息をついている。

「だいじょうぶ？　ベラ」

「え、ええ。何とか。実を言うとね、本格的な乱戦って初めてだつたから。情けない話だけど……ふう。うん、もう大丈夫よ」

「ベラでも初めてのことがあるんだね」

「それはそうよ。妖精の村は、まあ、今はこんな状態だけれど平和なところだし、あなたののような人間の子と一緒に冒険するようなこともないし。だからこそ頑張らないとね」

むん、とベラが拳を握り、アランは微笑んだ。

洞窟は、さらに奥に続いている。

「アラン」

ドワーフの洞窟を奥へ奥へと進んでいたとき、ふと、ベラが声を掛けってきた。

「この先是、できるだけ戦闘は避けるようにしましょう。もしモンスターと出くわしても、可能な限り逃げましょ」

「どうして?」

「今はまだ元気だからいいけど、帰りのことを考えないといけないでしょ? ましてや、奥のモンスターはかなり強力よ」

落ち着いた口調だが、よく見るとベラの額にはうつすらと汗が浮かんでいる。

確かに、ここに来てモンスターの強さが格段に上がった。かつてパパスとともに対峙したイタチ型のモンスターと出逢つたが、段違いの強さだった。同じ種でも、棲息地が違うとこんなにも強さに差が出るものなのだと、アランは初めて知った。それに『ラーバキング』の群れと戦ったときなど、『親分ゴースト』戦もかくやと思われるほど全力の戦闘を強いられている。

最奥部に辿り着き、そこでカギの技法を手に入れて終わり　　と
いうわけではないのだ。同じ道を辿つて帰らなければならない。それはすなわち、帰りの道中でも同じようにモンスターと出くわすと
いうわけだ。

「(一)のモンスターから逃げるのはかなり骨が折れるけど、だからといって全力で戦いっぱなしだと、すぐに体力が尽きてしまうわ」
「そうだね」

「まあ世の中には洞窟の奥深くから一瞬で地上に戻れる呪文があるらしいけど……やっぱり使える者は限られてくるでしょうね。私は無理」

アランは感心しながら聞いていた。そんな便利な呪文があるのかと驚くと同時に、やつぱりベラは物知りだと純粋に尊敬したのだ。羨望の眼差しに気づいたのか、ベラがふふんと胸を張っている。得意げに顔を上向かせた彼女は、足元をろくに見ないまま歩を進め、そのまま白い何かを踏んづけた。

ぱきん、と軽い音を立てて壊れる。

無造作に打ち棄てられた人骨だった。

「~~~~~ッ！」

言葉になつていらない絶叫にチロルがぴょんと跳ねる。何事かと周囲を見回す彼女を余所に、ベラは完全に混乱した様子で叫び続けていた。

「ベラ、ベラ！ 落ち着いて。だいじょうぶだよー。」「~~~~~！？ ~~~~~~ッ！…」

「なあーー！ なあああー！」

あらうことかチロルまで鳴き始めた。アランの服の裾を噛み、しきりに引っ張る。尻尾をぴんと立て、背中の毛を逆立てていた。振り返ったアランは「う……」と呻いた。

メラリザード、スカンカー、そしてラーバキング……この階で出会ったモンスターが勢揃いして迫ってきたのだ。反射的にアランは剣を構えるが、ベラがこの状態で果たして戦えるのかどうか、とても不安だった。

こういう場こそ逃げるべきなんだろう、そう思つたアランは、ベラの意見を聞こうと振り返る。が、

「…………あれ？」

そこには誰もいなかつた。

耳を澄ませれば通路の奥から足音が聞こえてくる。その意味をようやく理解したアランは、慌ててチロルに言った。

「こ、逃げるよチロル！」

「なー……」

背中を向けて一目散に退散する。何となく不満そうながらも、チ

ロルもしつかりついてきた。逃走の道すがら、アランはぼんやりと思つた。

「どうか、逃げるときはああやつて逃げるんだね……。

何と言つが、やつぱりすゞいですべラ。

「はあつ、はあつ、はあつ」

ゆつやくべラに追いつき、アランは肩で息をした。すでに階段を完全に下りきつて、下の階にまで辿り着いてしまつてゐる。通路の端で頭を抱えているべラが獣みたいなうなり声を上げていた。

「うひひ……よ、妖精族のべラともあらう者が、こんな小さな子の前で……」

どうやら先ほどの醜態をひどく後悔しているらしい。それでも息切れしていなあたり、実は彼女はアラン以上に体力があるのかもしれなかつた。

苦笑していると、またチロルが裾を引いてきた。注意を惹くように、控えめな力でアランを引っ張りうとする。

「どうしたの、チロル」

怪訝の声を出すと、べラも顔を上げた。二人でチロルの視線の先を見る。緩やかに曲がった道の先に、小さな小部屋らしき空間が見えた。入り口には壁と天井をぐるりと縁取るように文字が刻まれていた。

近づいて目を細めるも、筆跡の違う文字が入り乱れていて判読できない。ほとんど文字が読めないアランはなおさらだつた。すると、後ろに立つて同じように文字を覗き込んでいたべラが驚きの声を上げた。

「これ、古い妖精族の文字だわ」

「え？ そうなの？」

「ええ。しかもこれは、ドワーフたちが使つてゐた文字と一緒に刻んである。どういうことなのかしら……？」

アランは首を傾げた。妖精族とドワーフ族が一緒に文字を書くの

がそんなに不思議なことなのだろうか。

なあお、とチロルが鳴いた。部屋の奥に歩いて行く彼女をアランは抱き上げた。その姿勢のまま、固まる。

「ねえベラ。これって

「そうね。きっと間違いないわ」

ベラがうなずく。

彼らの前には、無骨で大きな宝箱がひとつ、台座の形に均された地面の上に置かれていた。土色に白地の縁取りがされていて、一目で頑丈であることがわかる。だがよく手を凝らすと、蓋のつまみ部分に小さな力ギがつけてあった。その表面には精緻な文様が刻まれている。

カギはつまみに引っかかるついているだけで、施錠はされていないようだ。

「私が開けましょうか？」

「ううん、僕がやるよ」

「わかった。何かあつたらすぐに対応するから」

ベラが一步下がる。アランは宝箱の前に立ち、深呼吸をひとつ、した。これまでにも何度も宝箱を開けた経験はあるが、今回は緊張感が違つた。

手を掛ける。少しだけ持ち上げた。重厚な見た目に反し、蓋はとても軽かつた。留め金がかかるまで、一気に蓋を開け放つ。がこん、という音が響き、宝箱は完全にその中身をさらした。

「……」

ふたり、しばらく無言で立ちぬく。彼らの顔に、宝箱から漏れ出した微かな光が反射した。

中に入っていたのはカギの技法を記した書物　　ではなかつた。

「きれい……」

思わずつぶやく。

宝箱の中身　　それはなみなみと注がれた薄青に輝く『水』であつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7449x/>

ドラゴンクエスト? ~天空の花嫁~

2011年11月23日12時45分発行